

神戸大学と篠山市の地域連携活動の
展開と課題

(2017年度都市農村共生研究ユニット現地交流会記録)

2018年3月

和歌山大学 食農総合研究所

神戸大学と篠山市の地域連携活動の 展開と課題

神戸大学・篠山市農村イノベーションラボの取り組み

橋田 薫

篠山市と神戸大学との地域連携事業

竹見 聖司・垣内由起子

西紀南まちづくり協議会の活動・成果と課題

北山 透

和歌山大学 食農総合研究所

2018年3月

はじめに

兵庫県篠山市と神戸大学大学院農学研究科の連携活動は2006年からはじまっている。神戸大学の学生が篠山市の農村現場に入り農家と交流しながら成長し、その後も町おこしに関わったり、農村に拠点を置き起業するものも現れているという。

食農総合研究所都市農村共生研究ユニットでは、2017年10月19日に研究ユニット参加教員7名が篠山市を訪ね現地交流会を開催した。最初にJR篠山口駅に設置されている神戸大学・篠山市農村イノベーションラボで、橋田薫氏（神戸大学・篠山市農村イノベーションラボ プログラムマネージャー）から農村イノベーションラボの取り組みをご講演頂いた。その後、神戸大学篠山フィールドステーションに移動し、篠山市役所創造都市課で神戸大学との連携事業を直接担当されてきた竹見聖司氏（創造都市課長）と垣内由起子氏（同課 定住促進係 係長）から連携事業の内容をご講演頂いた。両氏のご講演の後、学生と農家との交流の現場の一つである篠山市西紀南地区へ移動し、北山透氏（西紀南まちづくり協議会事務局長）から西紀南まちづくり協議会の取り組みについてご講演頂いた。

本研究成果第5号は、こうした現地交流会でのご講演と質疑応答の内容を録音から起こして研究資料として発刊した。過疎化、高齢化が進む農山村地域が、大学・大学生と連携して地域活性化を図ろうとする取り組みは増加しているが、実際に取り組みが継続し成功を収めている地域は少ないのではないかと思う。篠山市と神戸大学の連携活動は10年以上継続し素晴らしい展開をみせている。本冊子が、本学関係者をはじめ、地域活性化、地域再生に携わる関係者の皆さまのご参考となれば幸いである。

ご講演と本資料作成を快くご承諾いただいた橋田薫氏、竹見聖司氏、垣内由起子氏、北山透氏にお礼を申し上げたい。また、本交流会の開催は、神戸大学大学院農学研究科 中塚雅也氏のご協力によって実現した。本資料を作成するにあたり岸上美樹子さんにご協力いただいた。以上、記して感謝の意を表したい。

2018年3月

和歌山大学 食農総合研究所 辻 和良
(都市農村共生研究ユニット ユニットリーダー)

目 次

1 神戸大学・篠山市農村イノベーションラボの取り組み -----	1
付属資料 -----	7
2 篠山市と神戸大学との地域連携事業 -----	55
質疑応答 -----	59
付属資料 -----	71
3 西紀南まちづくり協議会の活動・成果と課題 -----	85
質疑応答 -----	94
付属資料 -----	109

神戸大学・篠山市農村イノベーションラボの取り組み

神戸大学・篠山市農村イノベーションラボ
プログラスマネージャー
(一般社団法人 EKILAB.)
橋田 薫

神戸大学・篠山市農村イノベーションラボは 2016 年 10 月 3 日、JR 篠山口駅にオープンしました。2006 年度に開設されました神戸大学篠山フィールドステーションとともに様々な活動を行っています。

1 神戸大学×篠山市の連繋の歩み

これまでの神戸大学と篠山市の連携の歩みをまとめています。

- 1949 年 兵庫県立農科大学 篠山市に開学
- 1966 年 神戸大学農学部（神戸市内）に移転
- 2006 年 神戸大学篠山フィールドステーション開設
- 2007 年 篠山市×神戸大学大学院農学研究科地域連携協定締結
- 2008 年 食農コーププログラム始動
- 2010 年 神戸大学（全学）×篠山市 地域連携協定締結
- 2014 年 篠山市地域おこし協力隊制度（半学半域モデル）始動
- 2016 年 神戸大学・篠山市農村イノベーションラボ開設

2 篠山市内での「授業」からの展開

実習やサークル活動で篠山に通う学生数は年々増加しています。

2008 年度から、神戸大学農学部では「食農コーププログラム」による実践的人材の育成に取り組むこととなりました。

1 年生の時は、農家に師事する「実践農学入門」に取り組みます。地元の農家さんを指導員とし、農作物の栽培や様々なむら仕事を体験しながら農業や農村生活の理解を深めます。2 年生になると現場の課題に参画する「実践農学」に取り組みます。

篠山市には 19 の小学校区があり、各小学校区ごとに学生を入れていくのですが、その地区の課題は何だろうという課題解決型（プロジェクト型）の演習に 2 年生になったら取り組んでもらいます。そういう階段で設計しています。そうすると学生団体に取り組む方が

出てきたり、地域おこし協力隊に立候補して学生をしながら協力隊員をする方が出てきたりと、篠山市を卒業してからも色々と篠山に関わっていく人が増えてきています。

実際にこれまで沢山の小学校区、篠山市に 19 あるのですが、毎年地域を変えて学生が活動するように設計しています。今は 8 カ所。全てではないのですが、学生サークルがそれぞれの地域にできています。4 年間で消えるサークルもあるのですが。実は、私もそのサークルの一つに入っていたのが最初で、代表もやっていたまちづくりに興味を持って、こういう世界にきたという感じです。

そういう同期の仲間も結構多くて、今協力隊員として 7 人活動しています。最初の協力隊は全員学生でした。今はちょっと制度が変わって社会人で起業したい方も入っています。学生で始めて、仲間たちと会社を立ち上げ、篠山の特産品を売ったりとか、移動カフェをしたりとか、教育事業の家庭教師のような寺子屋を地域でやるという事業で起業された方もいらっしゃいます。

3 官学連携事業の概要

官学連携の流れで色々な広がりが出てきているなかで、これは去年の黄色の報告書ですが、例えば、研究の内容でいきますと農学が中心になるのですが、文学部とか、保健学科も全学協定をしているので研究の内容は多岐にわたっています。例えば農地の関係であったりとか、農産物の活用であったりとか、住民ワークショップというか、小学校の跡地活用というテーマもありますし、色々な課題に研究で取り組んでいます。

2 番目の真ん中の段にありますのが地域人材育成についてです。主に二つです。先程お話したのが「食農コープ教育プログラム」という大学生向けの教育プログラムです。右側にありますのが「篠山イノベーターズスクール」という社会人向けのプログラムです。これをイノベーションラボができた 10 月に同時スタートしました。後ほど詳しくお話しします。

一番下の部分には活動支援を、地域のなかで大学教員がワークショップの支援をしたりとか、課題解決の相談にのったりとか、そういう活動をしていますという数字を書いています。本当に色々な会、営農組合さんとか、まちづくり協議会さんとか、小さい自治会さんともお付き合いをさせていただいています。

これらがこれまでの概要です。

4 イノベーションラボの取り組み

ここができた背景としましては、篠山市の人口減少対策ということがあります。現在人口 4 万人ですけれども、2060 年ぐらいに 2 万人ぐらいに減るという人口ビジョンの推計が

出ています。総合戦略のなかで「先駆的プロジェクトとして、イノベーションラボを設置しよう」ということになっています。

ここのミッションは、先程、「まち・ひと・しごと」といっていましたが、特にソーシャルビジネスの起業、それから地域での活動、若者が地域に入っていく窓口的なところの支援に力を入れています。

5 篠山イノベーターズスクールとは

篠山は、大阪、神戸からも1時間で来れる豊かな農村です。そういうこともあって社会人向けの「篠山イノベーターズスクール」をやっています。神戸や大阪とか、あと京丹後や養父の方からも来てくださっています。

これは実際にスクール生がイノベーションラボで何かを始めようとしている写真です。

そのスクールといいますが、「農村で新しい価値を生み出し、仕事をつくる人のための駅直結ローカルビジネススクール」と銘打って、受講料もいただいてやっています。「地域の資源を新しい価値として捉え直して、仕事づくりですとか、人づくりですとか、何かことを生み出していくということに活用しよう」というコンセプトでやっています。具体的には、地域に入るときに必要なネットワークであったり、理論的なアカデミックな部分であったり、それから地域ビジネスのテーマごとのノウハウを提供しようという内容でやっています。

6 篠山イノベーターズスクールの構成

講師に弟子入りしながら学ぶ Community Based Learning (CBL) というのを最大8名の少人数制で、毎回テーマを変えてやっています。それからセミナーは神戸大学の先生などを中心にアカデミックな部分で、地域で活用するのに必要な理論的な部分というのを補強するというので講義いただいています。起業・継業サポートというのが1年間スクール生をサポートするというので、ファシリテーター、伴走役を私たちが努めて、関係機関とも協力しながら支援をしています。

例えば CBL のテーマでいきますと、報告書にも詳しく学びの内容は書いてあるのですが、例えば1期の時は、「(仮称) 丹波食べる通信立ち上げプロジェクト」ということで、流通のテーマで、「丹波の食材を使って食べ物と情報誌を届ける流通の仕組み作ったらどうなるだろうか」というテーマでやってみたりですとか。

それから「クリエイティブ農業実践プロジェクト」というテーマは、市内の農家さんですけれども、「飲食店向けに野菜の売り方とか価値のつけ方、小さい面積で高い価値をもたせるにはどうやって売って農業として成り立たせていくか」というところを結構工夫して

おられる方に講師をお願いしてやったりとか。

あとは、「跡地活用スモールビジネス立ち上げプロジェクト」というテーマで、ちょうど小学校で廃校になって地域で活用方法を検討されている案件があったので、そこも学びの場にさせていただきながら、「もし自分がそこで起業して小学校運営をしていくことになったらどうしたいか」というプランを考えていって、地元の方とも対話していくというようなプロジェクトなどに取り組んでいます。

セミナーは盛りだくさんですけれども、1年間に6つのうちで3つ選べるようにしています。農業の流通のテーマですとか、農村のそもそもの課題、構造的な課題の理解とか、あとは地域の構造ですとか、あとはデザインのスキルだったり、事業コンセプトの立案のスキルだったり、企業のためのファイナンスというのも3期では取り入れています。

7 運営体制

起業・継業サポートは篠山市をはじめ、神戸大学、商工会、それから政策金融公庫だけではなくて、市内の金融機関、それから専門家のよろず支援拠点も入っていただいて、個別の相談に乗ったりするだけでなく、それぞれのビジネスプランを仲間と切磋琢磨しながら考えていく「ゼミ」をこの間開催しました。有志の方にプレゼンをしていただいて金融機関さんに助言をいただくというような機会も設定しています。

あと大事なのが、市内で「地域ラボ」という若者が活動できる拠点というのを一方で整備しています。そこにつなげるというか、地域で若者を受け入れたい地域がありますと手をあげられたところにスクール生が入っていくお手伝いをしたり、別に地域ラボでなくてもコーディネーターがつなげるのであればつないでいくというサポートをしています。

スケジュール的には1年間のプログラムのうちで最初に講師に弟子入りするCBLがあって、セミナーがあって、サポートを1年間続けていくという内容で、今は1期から始まり、もう3期生が入ってきています。1年に2回開講していますので、1期生がこの間卒業したあとに、3期生がもう入ってきたところです。こういう20代～60代ぐらいまでのメンバーです。1期につき20名ぐらいなので、今60名ぐらいが在籍している状況です。これは学んでいる様子です。

8 2期、3期のテーマと起業の実績

2期で、またCBLのテーマを変えました。例えば、「里山林業」というテーマで実際に篠山の山の棚卸しをして、この材をこう使ったらこう売れるとか、体験も含めて「どう価値をつけたらいいか」といったことを一緒に講師と考えていったりとか、「地域に根ざしたツアー企画開業プロジェクト」では、実際にモデルツアーを地域の素材を使って考えて、

地域の人とも共同してツアーを催行するというのをしました。観光ガイド、職種も色々ありますが、そういうことも学びつつ、実際にツアーをしたことも踏まえて自分はどういうスキルを生かして開業したいかということを考えるプロジェクトでした。

それから「草木を生かす手仕事づくりプロジェクト」というのは、地域の素材を、野草などを使って野草茶などを作っておられる方を講師に呼んだのですが、実際に篠山市内の地域で未利用資源があった地域があつて、加工組合もあり、地域の取り組みについてヒアリングをさせていただきながら、後にその商品開発にも関わりながら、今スクール生が活動している状況です。

プラン発表をむかえて卒業していった方々がいらっしゃいます。実際、起業の実績ももうすでに出ています。始めてまだ1年ですけども、後ほど行っていただく西紀南地区ですが、大学院を休学して新規就農を頑張っているという若い2人がいたり、このほかにも市内でUターンして農業を始めて、映像制作の仕事も元々フリーランスでされていたので、それと掛け持ちしながら、地域の農地をたくさん担って「豪農になっていた。気づいたら」といった方もいらっしゃいます。あとは市外からの参加で、市外での開業ですが、ゲストハウスを開業されたという方もいらっしゃいます。

3期は、またテーマを変えて、新しい農業の形で、市内でカフェと、農業と、狩猟と、色々掛け持ちで成り立たせているタイプの方ですが「フタバ型農業で就農プロジェクト」というテーマを行います。それから「ローカルメディアをなりわいにするプロジェクト」は、農村でメディアを運営するとなったらどういう形があり得るか、チャレンジしていくプロジェクトです。今これらが始まったところで、セミナーもここでやっています。

イノベーションラボは、そういったスクール生の方々が利用者として多いのですけれども、その方々が農村での起業、継業に向けて動いていけるために、色んな支援を行っています。ノウハウですとか、セオリーですとか、ネットワークの支援を行っていくのですが、特に、「地域とつなぐ」というのは頑張っていきたいなと思っているところです。今も地域のなかで実際に廃校となった小学校の運営にスクール生が関わっていたりとか、篠山出身の方でこういうきっかけがあつたから戻って来て、仕事もこちらで始めた方も実際いらっしゃいます。もっと、そういう流れを加速させていきたいと思っています。

9 イノベーションラボの様々な取り組み

スクールについて詳しくお伝えさせていただいたのですが、イノベーションラボは他にも取り組んでいることがありまして、エキラボマガジンに月々のことは載せています。例えば、市民の方も無料で参加できるセミナーというのも月1回のペースぐらいでやっていて、テーマは「農村イノベーションに関すること」です。例えば、「継業を考える夜」であったりとか、「空き家古民家の課題と魅力」であったりとか、「事業再生」だったり、「コ

「コミュニティづくり」であったり、「流通」であったり、「耕作放棄地」、そういったテーマで講師をお呼びしています。マイファームの西辻さんの時が一番多かったのですが、40名くらいの方が来て、夜に熱い議論をして帰っていくという感じです。

これは学生が発起して始めたラボでやっているプロジェクトで、「赤じゃがプロダクトをプロデュースするプロジェクト」です。これから行っていただく「あかじゃが舎」の地域なのですけれども、地域の営農組合の特産で、神戸大学とのご縁が発端でできたブランドというのがあって、これらの加工品を作り始めています。頑張ってもうちょっとプロデュースしていきたいので、地域の人と一緒にチームを組んでやっています。

それから JR 西日本福知山支社様にご協力いただき、「無人駅の活用案を考えようプロジェクト」というのを始めていたりとか、「ササヤマエキマルシェ」という催しを月1回くらい色んな形でやっています。地域の生産組合と提携してお茶フェアを企画したりもしています。あとはスクール生の作っている野菜のテストマーケティングです。

それから、森について学ぶコミュニティとか、色んなコミュニティ運営もしております。だいたいそういったところで、全体をお話しました。

付属資料

Rural
Innovation
Lab KOBE UNIV.
SASAYAMA

農村の
未来をつくる
駅ナカ実験室。

神戸大学・篠山市
農村イノベーションラボ
2016年10月3日(月)
JR篠山口駅にオープン。





ミッション

**農村地域における
まち・ひと・しごとの
創造的な循環を生み出す**

ラボの3つの取り組み

- 1) 地域創造研究** 農村地域の課題を解決し、新しい価値を生み出すような研究をおこないます。大学と地域の人や資源のマッチング、共同研究のコーディネートその他、基盤的な調査研究から、アクションリサーチといわれる実験的な研究まで幅広くおこないます。
- 2) 地域人材育成** 篠山や農山村地域を舞台に活躍する実践者たち、地域の発展に貢献しているリーダーたちの学びや挑戦、成長をサポートします。「食農コープ教育(大学生向け)」や「篠山イノベーターズスクール」など、地域に根ざした実践的な学習プログラムを企画支援します。
- 3) 情報・活動支援** さまざまな立場の人々のネットワークづくりを支援し、地域情報の共有と創造を進めます。各種ワークショップやセミナーなどをおこなうとともに、地域づくり活動、政策についてのアドバイスやサポートもおこないます。

神戸大学×篠山市の連携の歩み

- 
- 1949 兵庫県立農科大学 篠山市に開学
 - 1966 神戸大学農学部（神戸市内）に移管
 - 2006 神戸大学篠山フィールドステーション開設
 - 2007 篠山市×神戸大学大学院農学研究科
地域連携協定締結
 - 2008 食農コープ教育プログラム 始動
 - 2010 神戸大学（全学）×篠山市 地域連携協定締結
 - 2014 篠山市地域おこし協力隊制度（半学半域モデル）始動
 - 2016 神戸大学・篠山市農村イノベーションラボ 開設

篠山市内での「授業」からの展開 (2008-)

H20 市内3か所で試験開講



「授業」から学生の自主活動へ





まち協以外の住民を
巻き込んだ活動

福住地区の
計画づくりに参画

まち協メンバーになる
大学生としての
まちづくりアクション

地域イベントに参画
農作業ボランティア



2011

2012

2013

2014



食農コープ教育 プログラム FLASH

本プログラムでは、生産者・生活者の問題を発見し、学習教育で培ってきた専門性と結びつけ、解決に取り組むことのできる人材の養成を目的とし、現場を教材とした学習実践を実施します。なお、本プログラムは、神戸大学 ESD サブコースの単位に認定しています（詳細は神戸大学 ESD コース HP を参照）。

福住アート

生き物観察活動の活用

地域実践活動づくり

専攻生主体のまちづくり

農産物・加工品の活用

地元産物の活用

「西條のふじやが」の活用

竹ダントブリと活用

食と農の現場を支える実践力

卒業研究／進学・就職

経験と知識を融合させよう

農村ボランティア

農産物の収穫や販売を支援している農村ボランティアグループの活動を支援し、人手を補うことで農産物の収穫量を増やすことにつながります。

自主活動／学生団体活動

それぞれの関心に応じて、個人または団体として、実践活動を実施します。地域実践センターでは、地域の人々と連携しながら実践活動を実施します。

実践農学

実践活動の成果を授業に活かすことで、専門知識の習得・実践・応用を促進します。また、実践活動を通じて、専門知識の習得・実践・応用を促進します。

実践農学入門

現場での実践活動を通じて、専門知識の習得・実践・応用を促進します。また、実践活動を通じて、専門知識の習得・実践・応用を促進します。

現場に行ってみよう

地域をつくる活動や仕事を
知ろう・やってみよう

専門科目

Cooperative Education on Food and Agriculture
地域とともに育む実践力

篠山市地域おこし協力隊（半学半域）導入



地域おこし協力隊の起業



農産物を加工、郊外で学習塾経営…

地域課題 起業し解決

神大生ら「継続して貢献」

神戸大も同大大学院の学生らも活動している篠山市地域おこし協力隊が、合同会社を設立した。篠山の資源を生かした商品開発を通じて、農業活性化などに貢献。また地域に根を下ろし収益性のある事業を生み出すことで、最長3年の協力隊としての活動期間後も事業継続を目指す。（井垣和子）

篠山市の「協力隊」
社会的課題の解決に向けた取り組みを事業化する「ソーシャルビジネス」を展開する。会社名は、ルーフス（Rooftops）、ラテン語、丹波地域の「丹」と同じ赤色という意味で、神戸大のスクールカラーでもある。同市東新町の神戸大篠山フイールドスターション内に事務所を設けた。

資本金は50万円。協力隊の4人とコトナイター役を務める岡山芸術研究員の高田晋史さん（28）が出資した。代表社員は高田さんだ。

今後は食品メニューなど協力し、篠山産農作物を生かした加工品産や販売事業を展開する。

また、同市草山地区で夏まで小中高生向けの学習塾事業を立ち上げた。このほか、収益性の高い事業を開発することで、将来的に地域に根を立ち「1」として周辺部で塾家庭教師が必要としている。

高田代表社員は「生業をつくる」という目標への意気込みが合同会社を設立した地域おこし協力隊のメンバーら＝篠山市役所

01 地域創造研究

**里山の管理を再開して森を緑地へ持続させる
――地区への農業を再興して――**
原田 貴子 (神戸大学大学院経済学研究科)
◎農林経済、森林管理、有機栽培、バイオマス

**人工衛星画像解像を用いた兵庫県内の圃場毎
営農状況の自動判別法の開発**
長野 宇直 (神戸大学大学院経済学研究科)
◎農林土地情報、リモートセンシング、耕作放棄、
地域創出

繁殖した雑種の外来生物の活用方法の研究
鈴木 武志 (神戸大学大学院経済学研究科)
◎農林土地情報、外来種管理、外来種利用、
地域創出

住民主体の小学校校地活用計画の策定と課題
中塚 健治 (神戸大学大学院経済学研究科)
◎学校活用、児童福祉、高齢者、子育て支援、
農山草業活性化

地域固有性の発掘と農村発展モデルの確立
市原 隆治 (神戸大学大学院経済学研究科)
◎ブランド戦略、農村計画、都市圏農業、
地域創出

**規格外農産物に新たな価値の創出を目指した
地域連携商品の開発**
松尾 龍平 (神戸大学大学院経済学研究科)
◎地域創出、農産物、地域連携、社会福祉

**農産物の産地別における「種類別」とモノの
相互交渉に関する検証**
松尾 龍平 (神戸大学大学院経済学研究科)
◎産地別、モノ・モノ、農産物の交渉
エス・エス・エス・エス

**夏祭り運営を軸とした農産物流通の
発展過程に関する動向的解析**
藤原 航史 (神戸大学大学院経済学研究科)
◎夏祭り運営、地域創出、農産物流通、
農山草業活性化

**都市近郊の増産と環境創造型農業の発展に
関する研究**
浅野 志雄 (神戸大学大学院経済学研究科)
◎都市近郊、環境、都市農村交流イベント、
農山草業活性化

鎌山市における地域歴史遺産の保全と活用
山田 結城 (神戸大学大学院経済学研究科)
◎地域創出、古文書研究、インターネット活用
歴史、古文書の活用

【学生による調査・研究】
都市計画を通じた地域づくり手法の開発
菅原 将志 (神戸大学大学院経済学研究科)
◎都市計画、地域づくり手法、
インターネット

**母子にやさしい街づくり
―鎌山市乳児健診での取り組み―**
尾崎 美 (神戸大学大学院経済学研究科)
尾崎 美 (神戸大学大学院経済学研究科)
◎乳児健診、健康支援、健康チェック、
子育て支援の推進

**農村景観における自然環境の質と種子保全
―鎌山市地区を事例として―**
遠藤 直也 (神戸大学大学院経済学研究科)
◎農村景観の保全、自然環境、種子保全、
地域創出の推進

農村景観に対する良好特性と景観整備の方向性
三島 悠也 (神戸大学大学院経済学研究科)
◎農村景観、景観整備、良好特性、
農山草業活性化

02 地域人材育成

食農コープ教育プログラム

●実践農学入門 (0008-4576)

鎌山市内の農村地域で地元農家に指導し、農作業の観察や、
むら仕事を体験するなかで、農業や農村生活に関する理解を深め
ます(1回)。また、校内学習においては、体験から得た知識
をもとに、地域の課題解決に向けた提案を考案するためのワー
クショップ(2回)と農村体験活動やオンライン(3回)の参加(1回)
を設定しています。
平成28年度は、農学部や経済学部、工学部などの学生が大半参加
で最大級の経験や知識、収穫、定例などの農作業を全1グル
ープに分かれて実施しました。

交流会での田植え作業
第一回目の交流会では、実践農学入門を履
修した学生と地元農家の農家
さんや関係者による交流が盛
んになりました。
交流会では、農家さんらに農作業の
知識を伝えました。

最大豆の収穫と選別
年間を通して様々な農作物の
観察や体験し、実習農場では、こ
れまでの農作業によって育てた最大
豆を収穫しました。また収穫後は大き
さを選別しました。

**情報の整理やアイデアを
書くためのワークショップ**
この実習を終えた後、これまでに得
た経験や知識をもとにワー
クショップを行い、地域をよくするア
イデアやプロジェクトを提案しま
した。

【ホームページ】<http://kobe-face.jp> [facebook](https://www.facebook.com/kobecoop2016)

●実践農学 (0008-3776)

調査やプロジェクトへ実際に参加し、農村地域におけ
る現状課題を調査・分析することにも、課題解決に資する
取り組みや農家の企画立案から検証実験までのプロセスを理
解することを目的とします。
今年度は、インターンシップ型の支援として、市内の定住づくり
協議会や行政、地元企業など計7団体が発人となり、
プロジェクトごとに企画立案や実施を実施しました。

田植え **都市農村交流の振り返り**

山の歩き観察 **水辺の観察調査**

水・山の歩き観察 **農作物生産活動**

【ホームページ】<http://kobe-face.jp>

●CBL

Community Based Learningの略で、地域ビジネスの先駆者
とともにプロジェクトに取り組むことを通じて、その技術
やノウハウ、発想などを学ぶ地域プロジェクト実践型学習
で、CBLでの学びをもとに地域創出の発展や新たな価値の
創出を通じたビジネスに発展することも期待されます。
毎期3つのCBLが実施され、スクールのCBLのメンター
指導のもと、農山を舞台とする実際のプロジェクトをすすめ
ながら、実践的に学びます。具体的には、市町村地域にむける
現状課題を調査・分析し、企業創出法に習熟する事業や
農家の企画立案プロセスを理解することを目的とします。

丹波食への連携(aw)立ち上げプロジェクト
―生産者と消費者をつなぐ仕組みづくり―
※2017年度は、2016年度に引き続き、消費者と生
産者をつなぐ仕組みづくりの取り組みが実施されて
います。

クリエイティブ農産物プロジェクト
―未来を切り拓く農産物デザイン―
農産物・加工品を農産物や加工品と切り拓くこと、
消費者に訴求する農産物や加工品の企画立案、
商品化の取り組みを行います。

**施設活用スモールビジネス立ち上げ
プロジェクト**
―幼少児童を舞台に施設デザインを考案する―
施設活用スモールビジネスをテーマに、
幼少児童を舞台に「施設」の活用を模
索し、その活用に応じたような企画立案を実施して
いくことを目指します。

【ホームページ】<http://school.essaymataib.jp>

鎌山イノベーターズスクール (一期生編 1976)

●セミナー

入学教員や実務家による講義形式のセミナーです。引渡と事例を
基盤としながら、地域でビジネスや活動をおこなう上で必要とされる、
基礎的な理論や考え方を学ぶことができます。
2017年現在、全6つのセミナーが実施され、スクール生は、各自
のテーマや興味関心に合わせて、3つのセミナーを選択し、
ビジネス創出に必要な基礎知識や手法を学ぶことができます。

**システム・
デザイン思考** **食と農の流通と
マーケティング**
講師 尾崎 美 **講師 尾崎 美**

**農村
イノベーション** **ファンタジー
入門**
講師 尾崎 美 **講師 尾崎 美**

**地域の盛り立ちと
構造** **ローカルデザイン
スクール**
講師 尾崎 美 **講師 尾崎 美**

【ホームページ】<http://school.essaymataib.jp>

03 情報・活動支援

セミナー・
イベント開催

59件

篠山市と神戸大学は1年間の成果を広く市民に知ってもらい、今後の展開を考えるうえで意見をもらう場として、年に1度「篠山市・神戸大学地域連携フォーラム」を開催しています。その他、本年度は神戸大学文学部の古文書合宿、RLN第18回セミナー、WATANOWAプロジェクト、神戸大学の総合科目「ボランティアと社会貢献活動」の受入れなどを行いました。

視察件数

27件

関西圏をはじめとする計14の国内の大学とチュラロンコン大学やUPLBなどの国外の教育機関、内閣府をはじめとする各地方行政機関、長崎県や山形県の地域おこし協力隊員など、様々な公共団体や市民グループの視察受入れを行っています。

● 聖谷大学、兵庫教育大学、奈良女子大学、東京学芸大学、名古屋市立大学、富山大学、関西学院大学、大阪市立大学、大阪芸術大学(都不同)

相談件数

72件

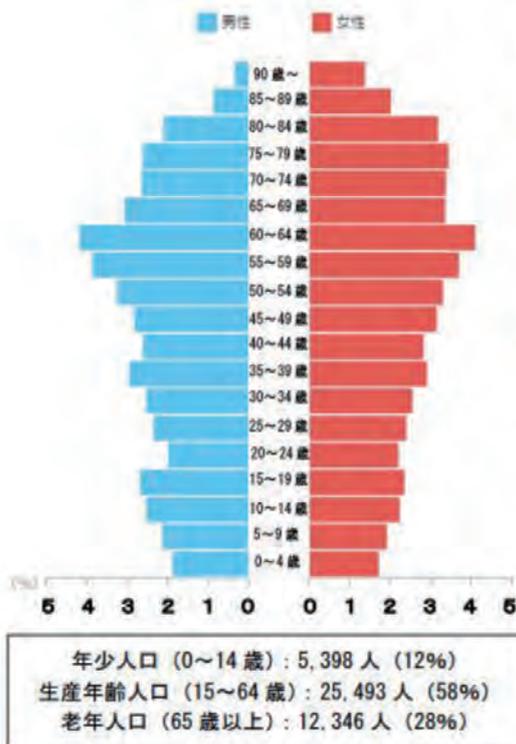
本年度は、相談件数、施設利用数ともに前年度よりも増加しました。特に、相談件数で最も多かったのは、地域住民からの相談で、次いで行政関係者、協力隊関係となりました。また、神戸大学以外の大学や地元高等学校といった教育機関からの相談や訪問件数が増加しました。

施設利用件数

187件

本年度は、例年実施されている神戸大学文学部の古文書合宿や留学生センターの「日本文化見学旅行」受入など、神戸大学関連の施設利用に加え、地元の高等学校の特別講義や演習、さらに、地元活動団体のセミナー開催等の利用がありました。

(2016年1月～12月)



篠山市

人口: 42,571人

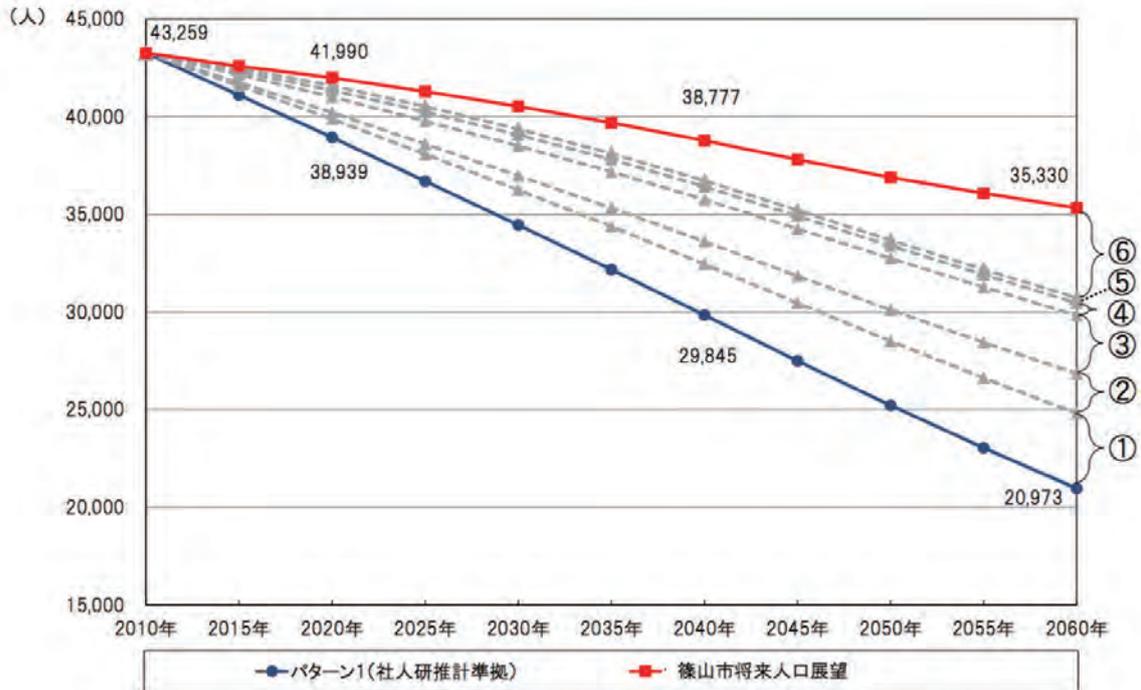
面積: 378 km²

(山林55%,農地13%,宅地2%)

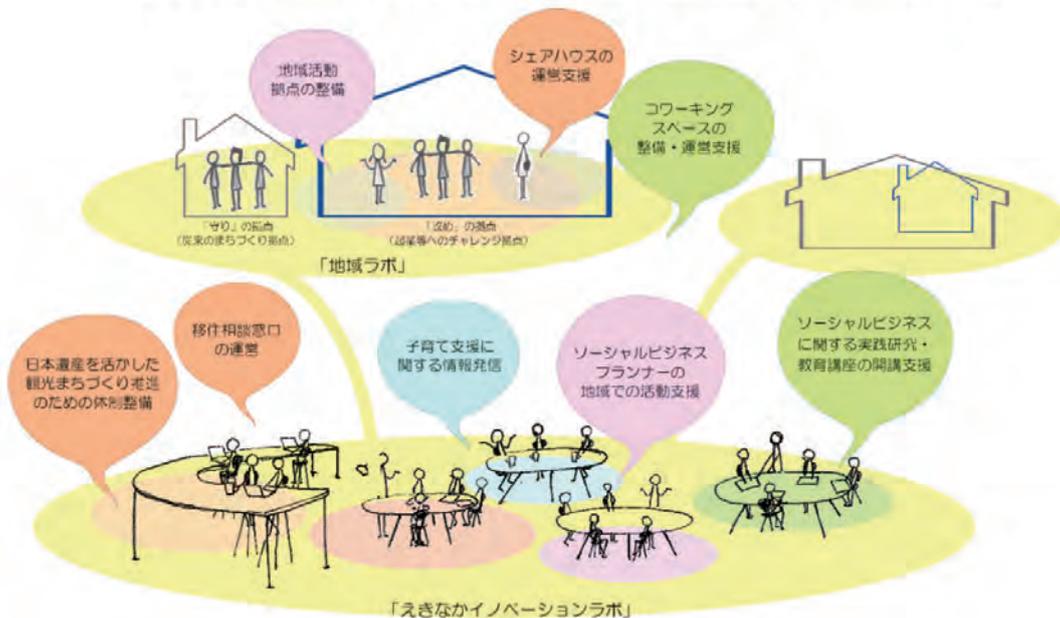
産業: サービス業(観光,福祉), 製造業, 農業



◎篠山市将来人口展望



「えきなかイノベーションラボ」と「地域ラボ」の連携を通じた篠山市の地方創生



ユネスコ創造都市ネットワーク
 (クラフトとフォークアート)加盟都市として

創造農村 篠山



丹波篠山 歌い継がれるふるさと 観光振興 地域活性化へ 節デカンショ「日本遺産」に

文化庁は24日、地域の歴史的魅力や特色などをテーマごとに一括認定する制度「日本遺産」を新設し、篠山市の「丹波篠山 デカンショ節」民謡に乘せて歌い継がれるふるさとの記憶」など18件を選んだ。篠山城跡など歌詞に登場する文化財群と、歌の継承の取り組みが認められた。

文化庁は24日、地域の歴史的魅力や特色などをテーマごとに一括認定する制度「日本遺産」を新設し、篠山市の「丹波篠山 デカンショ節」民謡に乘せて歌い継がれるふるさとの記憶」など18件を選んだ。篠山城跡など歌詞に登場する文化財群と、歌の継承の取り組みが認められた。

文化庁は24日、地域の歴史的魅力や特色などをテーマごとに一括認定する制度「日本遺産」を新設し、篠山市の「丹波篠山 デカンショ節」民謡に乘せて歌い継がれるふるさとの記憶」など18件を選んだ。篠山城跡など歌詞に登場する文化財群と、歌の継承の取り組みが認められた。

日本遺産は観光資源の掘り起こしや地域活性化が狙いで、40都府県から応募があった83件を有識者委員会が選考。東京五輪が開催される2020年までに100件の認定を目指す。外国人も含めた旅行者に地域の宝をアピールする。対象は文化財そのものではなく、風土に根差した建物や景観、文化、自治体の取り組みなどを総合的に評価。「価値や魅力を分かりやすく伝えるストーリー」を認定した。「文化庁」という。

デカンショ節は篠山市無形文化財の民謡で、江戸時代の盆踊り歌が起源とされる。明治以降、旧制高校などで愛唱され、現在も歌い継がれている。同市は歌詞に登場する篠山城跡や造り酒屋など15種類の文化財群を申請。城下町や農村の暮らしが歌にあり、丹波篠山の魅力が感じられる点が評価された。

ほかに、水戸藩校だった旧弘道館など茨城、栃木、岡山、大分4県の旧教育施設で構成する「近世日本の教育遺産群」や、四国遍路(四国4県)などが認定された。

兵庫県内ではほかに、「日本のほじまりの地 淡路島(淡路、洲本、南あわじ市)▽「やま・うみ・かわの交流を活かすまち(高砂市)▽「HIMEJI I 平和と安寧を祈るまち(姫路市)」の申請があった。今回は有識者委が1府県で1件に絞ったこともあり選ばれなかったが、今後再提案できる。

認定自治体には、文化庁がパンフレット制作やガイド育成などの費用を3〜5年程度支援助する。2015年度予算に8億円を計上。各自治体の計画に応じて配分する。

(山本哲志、安福直剛)

(平成27年4月 神戸新聞)



Rural Innovation Lab

KOBE UNIV.
SASAYAMA

神戸大学・篠山市
農村イノベーションラボ



cafe

hunting



agriculture



篠山イノベーターズスクール
2017年秋 3期生募集



Sasayama
Innovators
School

JR篠山口駅が、ローカルビジネスを生み出す学校に。

local media

ローカルと コラボする スクール



store

Sasayama

SASAYAMA CITY



KOBE UNIV.

応募期間 2017年8月10日(木) - 9月10日(日)



篠山イノベーターズスクール とは？

農村で新しい価値を生み出し

仕事をつくる人のための

通学型（駅直結！）、

ローカルビジネススクール。

地域の資源



新しい価値



しごと・ひと・こと

ローカルで、自分のしごとをつくる。

いま、農村地域は、仕事や経済、農業、自然環境、健康や福祉、歴史、文化など、さまざまな局面で問題を抱え、若者が移住しようにも、安定した仕事や暮らしに結びついていません。そうした中で求められるのが、新しい仕組みを創出する力、イノベーションです。

篠山イノベーターズスクールは、農村で新しい価値を見つけ、仲間や地域とネットワークをつくり、地域の課題を解決し、自分のしごとを生みだすための、1年間のプログラムです。

篠山を舞台に、地域ビジネス実践家に師事して取り組む実践的プロジェクト、農村での実践に必要な理論や知識を学ぶセミナー、そして、個別の課題に応じた起業・継業へのサポートを、地域や行政、専門家とともに、全力で提供します。



地域ビジネスのスタートアップに必要なものが得られます。

ノウハウ

地域ビジネス実践家への弟子入りを通じて、地域資源を活用し、新たな価値を創造するノウハウを学べます。

セオリー

地域での起業・継業や地域づくりに有用な視点・考え方・思考の基礎となる知識を、大学教授等に学ぶことができます。

ネットワーク

起業仲間との出会いや、地域の人・資源・活動に接続し、参画したり、コラボレーションしたりする機会が得られます。



地域イノベーターとして、
起業・継業に取り組む

篠山イノベーターズスクールの構成

1プロジェクト、最大 **8** 名。

地域ビジネス実践者に師事し
ノウハウやスキルを学ぶ

Community Based Learning

[全8回(3ヶ月間)×1プロジェクト]

篠山を舞台とするプロジェクトに参加し、地域ビジネス実践者からノウハウやスキルを学びながら、自分のビジネスモデルを構築していきます。



農村地域での活動に必要な
基礎知識を学ぶ

セミナー

[全8回×3セミナー]

大学教員や実務家から、地域でビジネスや活動を行う上で必要な理論や考え方を学びます。事例やワーク、対話を重視したセミナーです。



実践者や専門家とともに
起業・継業を進める

起業・継業サポート

[1年間]

地域や先輩実践者とのネットワークを活用し、ビジネス開始に向けての具体的な初動を支援します。またしごとづくりに向けて、個々の課題やステージに応じて、随時サポートを行います。



地域ビジネス実践者に師事しノウハウやスキルを学ぶ

Community Based Learning

以下より1プロジェクトを選択

フタバ型農業で 就農プロジェクト

月曜夜
開講



futaba cafe代表
農家 / 講師 / 林業家
西田 博一

農業とカフェ経営など、農業と親和性の高い事業を同時並行で走らせることにより、双方の価値を高めつつ、全体の収益性を高める農業のやり方を、「双業型農業」と捉えます。地域や自然の循環に即した事業展開や、個々のライフスタイルに合った新規就農にチャレンジするプロジェクト。

つながるその先

就農準備期間には地域の拠点に参加し、行政や農業組織との連携を図りながら、就農のための足場固めを進めていきます。

ファシリテーター
真鍋 邦大



ローカルメディアを なりわいにするプロジェクト

土曜
開講



株式会社morondo代表取締役
「枚方つーしん」編集長
原田 一博

地域に特化したポータルサイト「ひらつー」の運営ほか、マルシェやコワーキングスペースの運営、物販などを手がけている「ひらつー」編集部編集長原田さんに「ローカルメディア」のマネタイズを学びつつ、仲間とともに、農村におけるウェブとリアルなビジネスをつくり上げていくプロジェクト。

つながるその先

篠山の地域に特化した「ローカルメディア」の立ち上げメンバーへ。

ファシリテーター
横田 薫



地域と生きるお店を 継ごうプロジェクト

金曜夜
開講



つねよし百貨店
東田 一馬

大阪から移住し、村人たちの思いを受け継いで、「つねよし百貨店」の経営を担ってきた東田さんを講師に、ものを売るだけではない百貨店の役割について学びながら、篠山市内の商店主などとの対話を通じて、人や地域の資源を活かす経営のイメージを具体化していくプロジェクト。

つながるその先

個々のビジネスプランに合った篠山市内の継ぎ手を探し経営者との積極的なマッチングを促します。

ファシリテーター
衛藤 彬史



農村地域での活動に必要な基礎知識を学ぶ

セミナー

以下より3セミナーを選択

農村イノベーション



中塚 雅也

神戸大学農学研究所
准教授

こんなことが学べます

●農業農村と地域づくりの最新動向 ●イノベーションの発生原理 ●地域資源の整理と活用方法

クリエイティブ・デザイン思考



鶴田 宏樹

神戸大学産業・イノベーション
創造本部 准教授

こんなことが学べます

●考え方の考え方 ●体系化されたアイデア創出の手法 ●思考法に基づく事業コンセプト立案

地域の成り立ちと構造



奥村 弘

神戸大学人文学研究科 教授



横山 宜致

丹波の森研究所 専門研究員

こんなことが学べます

●村社会の成り立ちと地方自治体の展開 ●地域の空間特長の読み解き方 ●歴史文化遺産と景観の保全活用の方角性

ローカルデザインスキル



二階堂 薫

コピーライター

こんなことが学べます

●思いや考えを言葉化し、人に伝える際に必要な意識やスキル ●企画やデザインの基礎 ●伝わる身体作りの基礎と手順

起業のためのファイナンス



忽那 憲治

神戸大学経営学研究科 教授
科学技術イノベーション
研究科 副研究科長

こんなことが学べます

●利益を生み出す構造の理解 ●利益を生み出すためのリスクの分析 ●成長ステージ別のリスクと資金調達手段の関連性の理解

食と農の流通とマーケティング



小野 雅之

神戸大学農学研究所
教授

こんなことが学べます

●流通の役割と仕組み ●マーケティング理論の基礎 ●食と農のマーケティングの考え方

実践者や専門家とともに
起業・継業を進める

起業・継業 サポート

ビジネスモデルづくり
Plan

こんなサポートが受けられます。

- メンター支援
- 事業計画の作り方相談
- 資金調達の基礎知識
- 事業継承・再生に関する相談
- 新分野での創業に関する相談

地域での実践
Do&See

こんなサポートが受けられます。

- 仕事場(オフィス)の紹介
- 継業先の紹介
- 住居の紹介
- 地域での暮らしに関する相談

尼崎支店

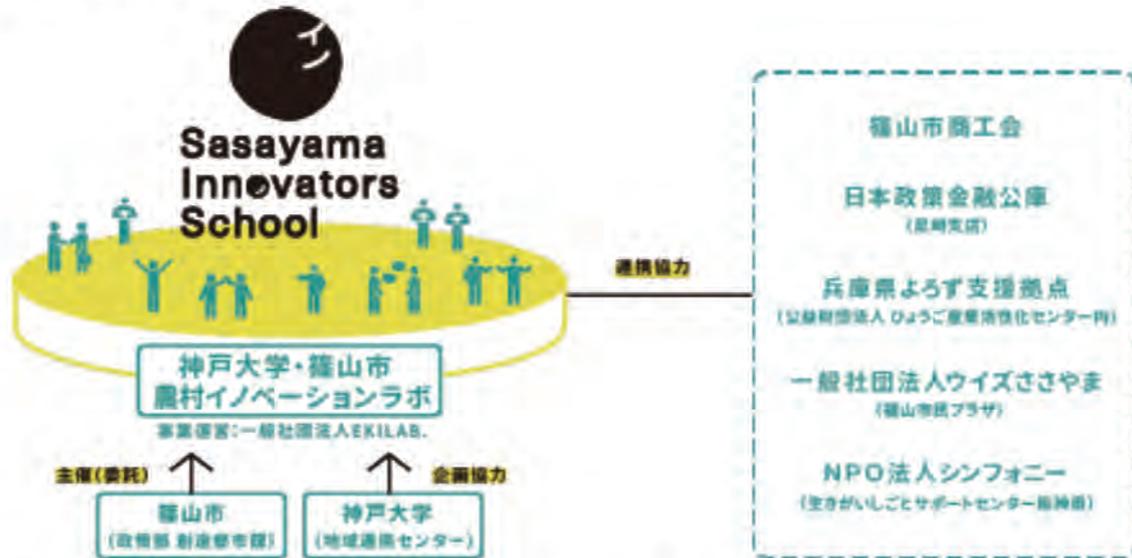
離陸
Take Off

こんなサポートが受けられます。

- メンター支援
- 事業計画の見直し相談
- 金融機関との融資相談会
- 分野に応じた創業支援補助金
- 販路開拓・PRに関する相談

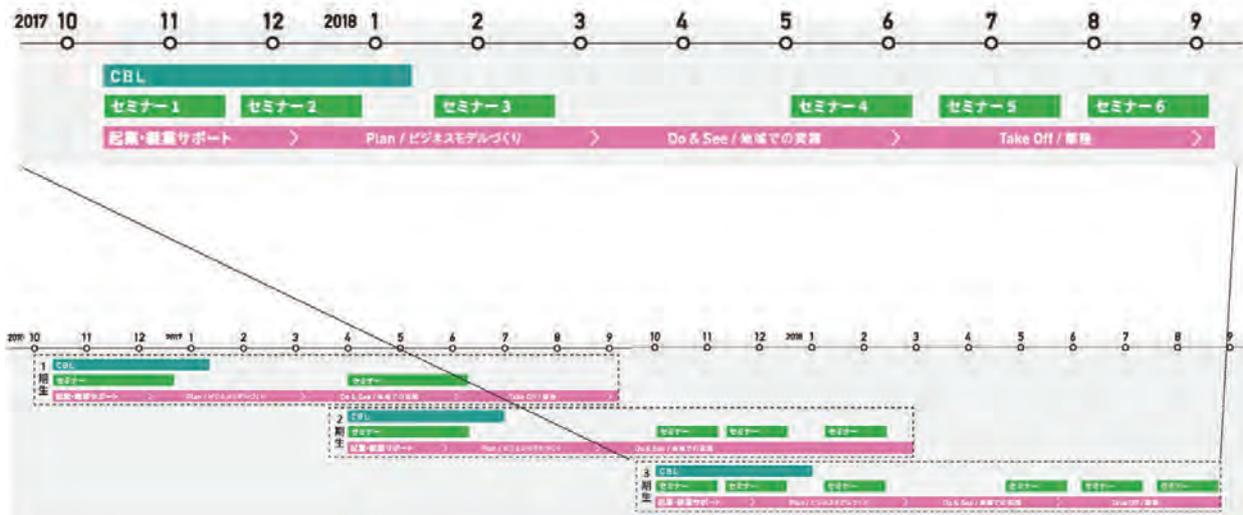
運営体制

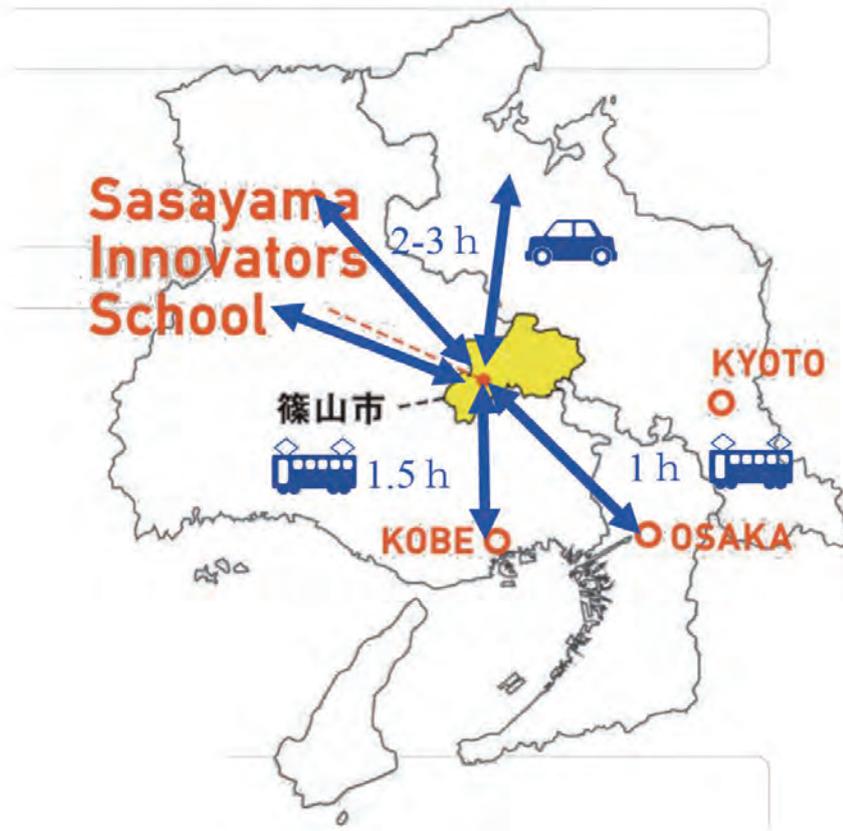
篠山イノベーターズスクールは、篠山市、神戸大学ほか、地域の関係機関の協力のもと運営されています。



主催：篠山市 事業運営：一般社団法人EKILAB. 企画協力：神戸大学・篠山市農村イノベーションラボ

スケジュール







Community Based Learning **1期**

「丹波食べる通信 (仮称)」

立ち上げ

プロジェクト

講師 / メンター
「四国食べる通信」編集長
眞鍋 邦大



Community Based Learning

1期

クリエイティブ

農業実践

プロジェクト

講師 / メンター
吉良有機農園

吉良 正博 / 吉良 佳晃





Community Based Learning

1期

跡地活用 スモールビジネス 立ち上げ プロジェクト

講師 / メンター

「ミドリカフェ」オーナー / ランドスケープデザイナー

ウチダ ケイスケ







Community Based Learning **2期**

これからの 里山林業創造 プロジェクト

講師 / メンター
有限会社ウッズ 代表取締役
能口 秀一





Community Based Learning **2期**

**地域に根ざした
ツアー企画開業
プロジェクト**

講師 / メンター
悠ツアー 代表
森 聖太

A group of people are sitting on a stage, smiling. In the foreground, a man in a blue shirt is smiling. The background is a stage with a wooden floor and a whiteboard.





Community Based Learning 2期

**草木を活かす
手仕事づくり
プロジェクト**

講師 / メンター
美し山の草木舎
渡部 康子





23歳コンビが新規就農

由緒名権りて新規就農した高橋さん(左)と大坂さん
＝備前市黒田で



将来はレストランも

【備前市黒田】23歳の高橋さん(左)と大坂さんが、備前市黒田で新規就農を始めた。高橋さんは、大坂さんとともに、黒田の地産野菜を育て、レストランでも販売する計画だ。高橋さんは、大坂さんとともに、黒田の地産野菜を育て、レストランでも販売する計画だ。

U-1ターンの高橋さん

高橋さんは、大坂さんとともに、黒田の地産野菜を育て、レストランでも販売する計画だ。

備前市黒田の若手農業者、高橋さん(左)と大坂さん(右)が、黒田の地産野菜を育て、レストランでも販売する計画だ。高橋さんは、大坂さんとともに、黒田の地産野菜を育て、レストランでも販売する計画だ。

駅ナカ講座 起業へプラン

篠山第一期生が発表

備前市黒田の駅ナカ講座「起業へプラン」第一期生が発表会を行った。発表者は、黒田の地産野菜を育て、レストランでも販売する計画だ。

古民家の家具再生、農産物直売所...

地域ビジネス実践者に師事し
ノウハウやスキルを学ぶ

CBL

地域プロジェクト型学習

Community Based Learning 3期

フタバ型 農業で就農 プロジェクト

講師/メンター
futaba cafe 代表/農家/講師
西田博一

Community Based Learning 3期

ローカルメディアを なりわいにする プロジェクト

講師/メンター
株式会社 morondo 代表取締役
「枚方フェスティバル」編集部
原田一博

Community Based Learning

3期

ローカルメディアを なりわいにする プロジェクト

講師 / メンター

株式会社 morondo 代表取締役
「枚方つーしん」編集部

原田一博



Sasayama
Innovators
School

Community Based Learning

ローカルメディアを なりわいにする プロジェクト

講師 / メンター

株式会社 morondo 代表取締役
「枚方つーしん」編集部

原田一博



限定 8 名

メンバー募集

募集期間

2017. 8/10 → 9/10

地域に特化したポータルサイトの運営ほか、マルシェやコワーキングスペースの運営、物販などを手がけている「ひらつー」編集部の原田さんに「ローカルメディア」のマネタイズを学びつつ、仲間とともに、農村におけるウェブとリアルなビジネスをつくり上げていくプロジェクト。

この CBL で得られるもの

- > ネットとリアルでのコンテンツとコミュニティづくりの手法
- > 地域で生きていく「メディア」の可能性への手がかり
- > 自分のやりたいメディアを始めるきっかけ
- > 「ローカルメディア」を収益化する手法

講師プロフィール

株式会社 morondo 代表取締役。1981 年大阪府枚方市生まれ。1999 年特に佐賀県佐賀市に morondo 創立。学生時代より株式投資をはじめ起業するまで個人投資家として過ごす。2008 年に起業し、10 年より「枚方つーしん」を本田一高（共同経営者）と運営。「枚方つーしん」(通称ひらつー) は大阪府枚方市に特化したローカルメディア。月間約 240 万 PV のウェブサイトのみならず、リアルでのコワーキングスペースの運営やマルシェの開催なども手がける。

ローカルとコラボするスクール | 山山イノベーターズスクール

つながるその先

- > 地域の編集者
- > 地域を拠点にした「コト」づくり、「コト」発信
- > 現在活動中の「メディア」ごとのコラボレーション



2020
10
11
12
1
2
3
4
5
6
7
8
9

1 トライアウトガイダンス
10/9 (月・祝)
10:40-12:40
◎ 農村イノベーションセンター

2 ローカルメディアとは何か
10/21 (土)
13:10-14:40
◎ 農村イノベーションセンター

3 ローカルメディアの役割を学ぶ
10/28 (土)
13:10-14:40
◎ 農村イノベーションセンター

4 地域を巻き込んだコンテンツづくり
11/11 (土)
13:10-14:40
◎ 農村イノベーションセンター

5 ローカルメディアのブランディング
11/18 (土)
15:10-16:40
◎ 地方自治体・関係者

6 ローカルメディアのブランディング
12/2 (土)
15:10-16:40
◎ 農村イノベーションセンター

7 ローカルメディアのブランディング
12/16 (土)
13:10-14:40
◎ 農村イノベーションセンター

8 閉会式
1/8 (月・祝)
10:40-12:10
◎ 農村イノベーションセンター

【 稲山イノベーションスクールの構成 】
Community Based Learning (28時間) + セミナー (6時間) + 卒業実践 (14時間)

地域ビジネス実践者に師事し、ノウハウやスキルを学ぶプロジェクト
稲山を舞台とするプロジェクトを体験し、地域ビジネス実践者からノウハウやスキルを学びながら、自身のビジネスモデルを構築していきます。

私たちが行います！
担当
プロジェクトリーダー
橋田 薫

【 募集人数 】
各CBLにつき限定8名の少人数制
※1の募集定数が超過、超過定数で15名まで対応いたします。

【 応募資格 】
・高校以上卒業、セミナーの会費に特別参加できる方
・農村地域での起業・就業や活動経験を有する方

【 応募方法 】
ホームページのエントリーフォームまたはAXISにて
お申し込みください。応募開始はお知らせいたします。

【 受講料 】
80,000円
稲山イノベーションスクール（CBL）+ セミナー
3コマ + 起業・就業サポート1コマには参加費が
かかりません。1年間のプログラムです。
※2コマ以上の申し込みは、卒業料を
50,000円とする方がございます。
※1コマのみ、教材費やフィールドワークのための交通費
等がかかります。事前にご確認ください。
※2コマ以上の申し込みは、卒業料を
50,000円とする方がございます。

【 お申込から開講までの流れ 】
お申込 → 書類送付 → 決定の通知 (約10日)
→ 受講料の納入 → 開講

主催：稲山市 運営：一般社団法人EKKAB
企画協力：神戸大学・稲山市農村イノベーションラボ

【 お問合せ先 】
稲山イノベーションスクール事務局
〒669-2212 兵庫県稲山町大沢1-65-1
神戸大学・稲山市農村イノベーションラボ
Tel & Fax : 079-508-6828
Mail : info@esayamalab.jp
HP : www.schp1.sasayamalab.jp

CBL | ローカルメディアをよりおいにするプロジェクト

Community Based Learning **3期**

**フタバ型
農業で就農
プロジェクト**

講師 / メンター
futaba cafe 代表 / 農家 / 猟師
西田博一



フタバ型 農業で就農 プロジェクト



講師 / メンター
futaba cafe 代表 / 農家 / 獣師
西田博一

限定 8 名
メンバー募集 2017.8/10 → 9/10

農業とカフェ経営や狩猟、林業など、農業と親和性の高い事業を同時並行で進らせることにより、双方の価値を高めつつ、全体の収益性を高める農業経営のあり方を、「フタバ（双葉）型農業」と捉え、双方の事業価値を高めるために必要な考え方や、新規就農の期に注意すべきポイント等を習得していきます。プロジェクトを通じて、個々の趣向やライフスタイルに合った新規就農にチャレンジと事す。

つながる...その先
 > フタバ型農業実践者
 > 地域農業の担い手
 > 循環型社会への牽引役

この CBL で得られるもの

- > 「農業」と「OO」といった、二本立ての経営で生計を立てる考え方
- > 新規就農の際に大切にすべきこと、注意すべきポイント
- > 双方の事業価値を高めるための事業運営の方法
- > 地域や自然の循環を生かした事業展開のあり方



講師プロフィール

1974年兵庫県神戸市生まれ。1丁間建社を経て2010年にリターン。農業をしながら2011年よりブルーベリー園を併設したカフェを経営。農業と相性の良い地産産品を組み合わせて双方のノウハウやメリットを活かした事業展開を進める。里山と山奥に愛もれた資源の活用を模索し、狩猟にも従事。

ロー・コストとコササキなスタイル | 岡山イノベーターズスクール

10/9 (月・祝)	10/30 (月)	11/3 (全・祝)	11/13 (月)	11/27 (月)	12/11 (月)	12/18 (月)	1/8 (月・祝)
キックオフガイダンス	フタバ(双葉)型農業とは?	futaba cafe 現地見学	新規就農のステップ	新規就農のステップ	狩猟・林業へのステップ	フタバのファンタジーファンタジー	オンライン発表会
10:40-12:40	19:40-21:10	13:30-16:00	19:40-21:10	19:40-21:10	19:40-21:10	19:40-21:10	10:40-12:10
岡山県イノベーションスクール	岡山県イノベーションスクール	futaba cafe	岡山県イノベーションスクール	岡山県イノベーションスクール	岡山県イノベーションスクール	岡山県イノベーションスクール	岡山県イノベーションスクール

【岡山イノベーターズスクールの構成】

Community Based Learning (10日間) + メンター (3名) + 地域・産業界アドバイザー (14名)

地域ビジネス実践者に師事し、ノウハウやスキルを学ぶプロジェクト
 岡山を舞台とするプロジェクトに挑戦し、地域ビジネス実践者からノウハウやスキルを学ぶながら、自身のビジネスモデルを構築していきます。

私たちが存じます！
 担当: オンラインコーディネーター 齋藤 邦大

【募集人数】
 各CBLにつき限定8名の少人数制
 ※応募者多数の場合は、抽選をさせていただきます。

【応募資格】
 ・高校以上のCBL、セミナーの全てに参加可能な方
 ・農村地域での起業・就業や活動経験をお持ちの方

【応募方法】
 ホームページのエントリーフォームまたはFBにて
 申込書の送信をお願いします。応募締め切りは、応募開始日の前日です。

【受講料】
 80,000円
 岡山イノベーターズスクールは「就労サポートセンター」が主催する「起業・就業サポートセンター」が主催される、1年間のプロジェクトです。
 ※申込までの学費(大学・大学院生)は、学費助成金の対象外です。
 ※申込により、教材費やワークショップのための消費等がかかる場合がございます。事前に確認ください。
 ※セミナー参加費を別途徴収することも可能です。詳細はホームページでご確認ください。

【お申込から開講までの流れ】
 応募受付 → 書類選考 → 決定のご連絡(9/15) → 受講料のお申し込み → 開講

主催: 岡山県 運営: 一般社団法人EKB&B
 企画協力: 神戸大学・岡山県イノベーションスクール

【お問合せ先】
 岡山イノベーターズスクール事務局
 〒664-2112 兵庫県神戸市大沢165-3
 神戸大学・岡山県イノベーションセンター
 Tel & Fax : 079-550-6628
 Mail : info@sasayamab.jp
 HP : www.school.sasayamab.jp

Seminar 2017.10-12

JR 山口駅直結、岡山イノベーションズスクールの
アカデミックな6回連続セミナー

(土)

農村 イノベーション

講師
神戸大学大学院農学研究科 准教授
中塚 雅也



1	農業・農村の現状と課題： 地域資源の視点から	10/14 (土) 10:40-12:10
2	地域づくりの潮流と イノベーションの必要性	10/21 (土) 10:40-12:10
3	イノベーション理論の基礎	11/11 (土) 10:40-12:10
4	市場・競争とイノベーション	11/18 (土) 10:40-12:10
5	組織・コミュニティと イノベーション	12/2 (土) 10:40-12:10
6	イノベーターに必要なもの	12/2 (土) 13:10-14:40

Seminar 2017.10-12

JR 山口駅直結、岡山イノベーションズスクールの
アカデミックな6回連続セミナー

(水)

クリエイティブ・ デザイン思考

講師
神戸大学産業・イノベーション創造本部 准教授
鶴田 宏樹



1	イノベーションにおける デザイン思考・価値変換の重要性	10/11 (水) 19:40-21:10
2	創造的思考とインサイト抽出	10/25 (水) 19:40-21:10
3	デザイン思考の模擬ワークショップ①	11/8 (水) 19:40-21:10
4	デザイン思考の模擬ワークショップ②	11/22 (水) 19:40-21:10
5	ロジカル思考	12/6 (水) 19:40-21:10
6	システム思考の概要とまとめ	12/20 (水) 19:40-21:10

地域の -空間と歴史- 成り立ちと構造

講師
 神戸大学大学院人文学研究科 教授
奥村 弘
 丹波の森研究所 専門研究員
横山 宜致



1	地域歴史遺産と地域づくり	1/22 (月) 19:40-21:10
2	江戸時代に生まれた村社会 —その特徴をさぐる—	1/29 (月) 19:40-21:10
3	近代日本の地方自治と町村合併	2/5 (月) 19:40-21:10
4	丹波・篠山の地勢と集落立地	2/19 (月) 19:40-21:10
5	街道村と商家、城下町の空間構成	2/26 (月) 19:40-21:10
6	景観計画と土地利用形成	3/5 (月) 19:40-21:10

起業のための ファイナンス

講師
 神戸大学大学院 経営学研究科 教授 /
 神戸大学大学院 科学技術イノベーション研究科 副研究科長・教授
忽那 憲治



1	イントロダクション —整合性のある事業戦略の重要性—	6/2 (土) 13:10-14:40
2	利益を生み出す構造を理解する —利益構造図の作成—	6/2 (土) 15:10-16:40
3	利益を生み出すためのリスクを分析する —原価の一覧表と財務モデルの作成—	6/16 (土) 13:10-14:40
4	利益を生み出すためのリスクを分析する —感応度分析—	6/16 (土) 15:10-16:40
5	ベンチャー企業の成長ステージと 資金調達手段の関連性を理解する	6/30 (土) 13:10-14:40
6	ベンチャーキャピタルの仕組みを 理解する	6/30 (土) 15:10-16:40

Seminar 2018.7-8 (土)

JR 山口駅直結、山口インバーターズスクールのアカデミックな6回連続セミナー

食と農の流通とマーケティング

講師
神戸大学大学院農学研究科 教授
小野 雅之



1	流通の役割と仕組みを学ぶ	7/14 (土)	10:40-12:10
2	食品・畜産物の流通の仕組み・特徴と新たな動きを知る	7/21 (土)	10:40-12:10
3	マーケティングの基本的な考え方を学ぶ	7/28 (土)	10:40-12:10
4	マーケティングの新たな動きを知る	8/4 (土)	10:40-12:10
5	地域・人・モノ・コトを活かしたマーケティングを考える①	8/11 (土)	10:40-12:10
6	地域・人・モノ・コトを活かしたマーケティングを考える②	8/11 (土)	13:10-14:40

Seminar 2018.8-9 (水)

JR 山口駅直結、山口インバーターズスクールのアカデミックな6回連続セミナー

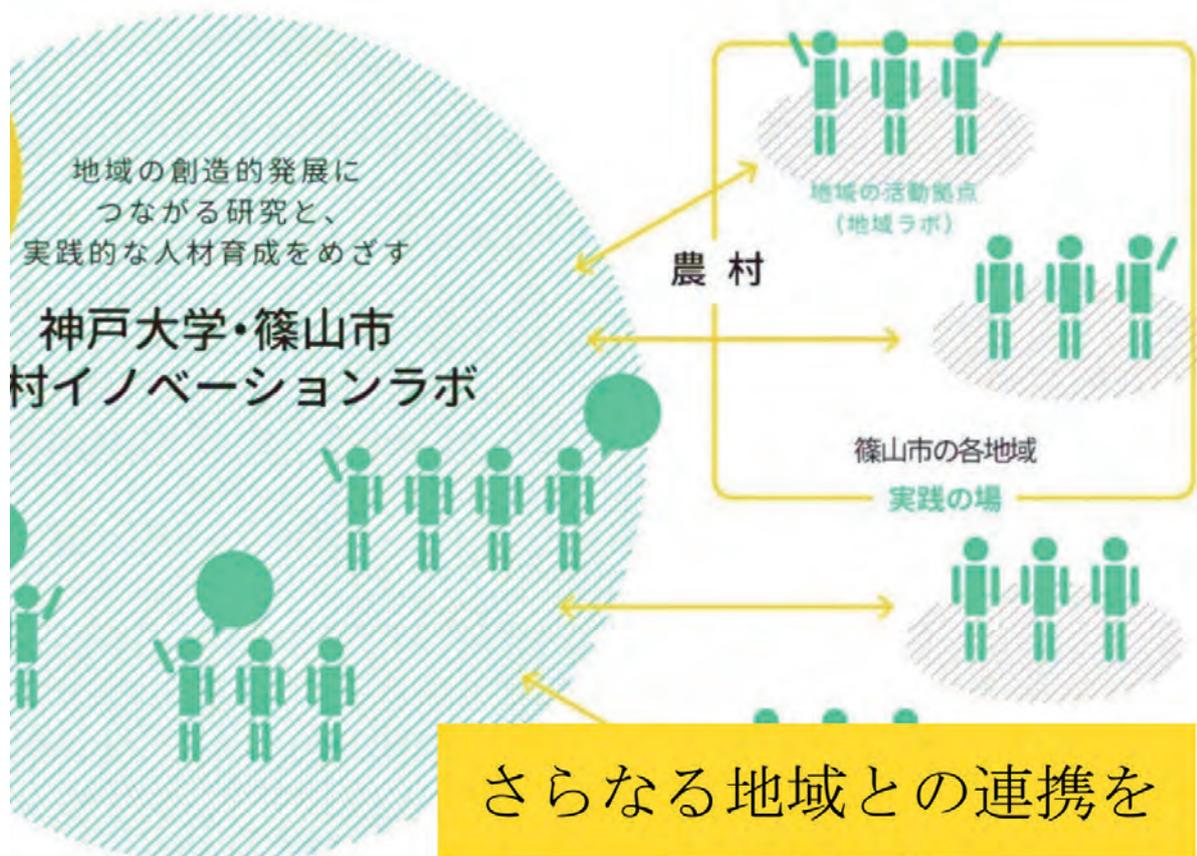
ローカルデザインスキル

講師
コピーライター
二階堂 薫



1	自分の思いや考えを言葉化する重要性	8/22 (水)	19:40-21:10
2	伝える際に必要な意識や技術	8/29 (水)	19:40-21:10
3	伝わる媒体作りの基礎	9/5 (水)	19:40-21:10
4	伝わる媒体づくりの手順	9/12 (水)	19:40-21:10
5	伝わる媒体づくり：ローカルの素材をつかったデザイン	9/19 (水)	19:40-21:10
6	伝わる媒体づくり：デザイナーや専門家との連携	9/26 (水)	19:40-21:10

農村での起業・継業に向けて
ノウハウ、セオリー、ネットワークを支援



月1回「エキラボマガジン」を発行。



2017年6月、キックオフ。

赤じゃが

赤プロ

プロジェクトを

プロデュースする

プロジェクト

初回MEETING

6/11(日)

14:00-16:00

@神戸大学・篠山市農村イノベーションラボ

赤じゃがをもっと、有名に。

「赤プロ」は神戸大学から生まれた「赤じゃが」を使ったグッズの販売を応援するプロジェクトです。

2012年、神戸大学農学部と篠山市真用食農産物組合が共同開発した「赤じゃが」は、その名の通り皮が赤く、煮てもくっくとした食感が特徴です。生産地域では、そんな「赤じゃが」をもっと知ってもらうためのケーキやアイスに加工した製品を試作しています。「赤プロ」ではすでに試作されている製品のデザインや販売戦略、また新たな製品の開発と一緒に取り組んでくれる方を募集しています。

活動は基本毎月第1土日、社会人から学生まで参加いただけるプロジェクトです。これからの地域活性化に繋がる製品を、考えてみませんか？

参加希望 - 問合せはこちら

Email: akk@sga.prs@gmail.com

(発起人: 神戸大学農学部研究員 岡塚加寿子)

または

神戸大学・篠山市農村イノベーションラボ スタッフまで



無人駅イノベーション!!!

プロジェクトメンバー募集中

募集期間

2017.6.1→6.21

無人駅の活用案を考えよう!プロジェクト

福知山線における篠山市内の無人駅(草野駅・古市駅・南矢代駅・丹波大山駅)について、地域の活性化につながる活用案を考えます。

- 実施期間:平成29年7月~10月(4ヶ月間)
- 活動頻度:月2回・定例ミーティングを開催(隔週水曜19:00~)
- 活動拠点:神戸大学・篠山市農村イノベーションラボ(JR篠山口駅自由通路内)

*オリエンテーションと現地視察を7月2日(日)13時より開催します。

募集人数 15名程度(学生枠5名/社会人枠10名)

※社会人は50歳以下の方限定、応募者多数の場合抽選します。

参加費 5,000円 ※全額、アイデア実施費用として活用します。

応募方法

TEL・FAX共通(079-506-6628)またはメール(info@sasayamalab.jp)にて

①名前(ふりがな) ②電話番号 ③メールアドレス
をご連絡ください。

事務局/お問い合わせ

神戸大学・篠山市農村イノベーションラボ(JR篠山口駅東口・自由通路内)
TEL/FAX:079-506-6628 メール:info@sasayamalab.jp

主催:神戸大学・篠山市農村イノベーションラボ 協力:西日本旅客鉄道株式会社福知山支社



月1回（目標）、
JR篠山口駅前
「ササヤマエキマルシェ」
を開催。



森の学び舎



Rural Innovation Lab

KOBE UNIV.
SASAYAMA

神戸大学・篠山市
農村イノベーションラボ

篠山市と神戸大学との地域連携事業

篠山市政策部創造都市課
課長 竹見 聖司

昨日も神戸大学と篠山市の方での1年間に1回の協議会を、調整機会を設けさせていただきました。神戸大学の方で内田理事、地域連携センターの奥村室長、農学部の地域連携センターの星先生といった方々と一緒に会議を持たせていただいております。

神戸大学との連携につきましては、杵本先生を含めて以前から色々とお世話になっております。駅ラボの方でも幾らかお話をさせていただいていたと思うのですが、できるだけ重複しない格好でと思っております。あとで現地もみていただくということですので、時間的には10分か15分ぐらいでお話させていただいて、あとご質問をいただくという形で考えておりますので、よろしく願いいたします。早速ですけれども、担当の垣内の方から説明させていただきます。

篠山市政策部創造都市課
定住促進係 係長 垣内 由起子

篠山市創造都市課定住促進係の垣内と申します。私はこの4月から現在の部署にきまして、官学連携の方を担当させていただいております。午前中、駅ラボの方に行かれたということでお話に重複する部分があるかもしれないのですが、こちらのA4の資料と駅ラボで午前中説明された時の資料を使って説明させていただきます。

1 連携事業の経緯

まず、篠山市と神戸大学との連携事業の経緯というか、始まりですけれども、元々、兵庫県立農科大学が篠山市内にごございました。それが神戸大学農学部の方に移管になりまして、1967年に篠山市内から大学がなくなったという状況になりました。そのあと、平成19年（2007年）に神戸大学農学部と地域連携の協定を結んでおります。そして、平成22年（2010年）に神戸大学と地域連携の協定を結んだという経緯で現在に至っております。

2 事業の目的

地域連携の目的ですけれども、篠山市側としましては、市全体を「生きた現場」として、

大学の研究者・学生さんへ研究のフィールドや、連携先の紹介、活動拠点の提供を行うことによって、篠山市が抱える地域課題の解決と地域の活性化を図っていききたいという目的でこの連携事業をスタートしております。

3 篠山市と神戸大学の役割分担

篠山市側の役割を説明します。ここが「篠山フィールドステーション」という施設です。篠山市では、ここを事業の活動拠点として無償貸与しています。貸与なので管理の方は神戸大学の方にさせていただいているという形になっています。連携事業に要する経費は、年間約 580 万円程度の負担金をお支払いしています。これについては、フィールドステーションの管理・運営と、あとはここに駐在の研究員を置いて、地域の相談や地元の方の相談にあたって欲しいということをお願いしています。そういった方の人件費に充てたりとかという形で活用させていただいております。

4 主な連携事業

資料の下の方に「主な連携事業」というところにもあるのですが、ここの全体の連携事業とは別に、各課の方で分野別に事業を神戸大学と実施しています。これらにつきましては、別途、業務委託契約を結んでいたりと、謝金が払われていたり、また、研究という形で行われていたりとか、色々な形になっています。篠山市としては、神戸大学とフィールドになる地域との企画や調整の窓口をさせていただいているという形になります。

神戸大学側の役割としましては、先程申し上げましたように相談窓口業務ということで、フィールドステーションに駐在の研究員の配置をお願いしています。また、各研究に関する研究員を置いていただくとか、大学の運営と関係しますが、そういった経費の負担ですとか、こちらのフィールドステーションの活用と管理の方をお願いしております。

今のところ、主な連携先としては、事業の総合的な窓口ということで地域連携推進室、元々農学部との地域連携事業がスタートになっているということで、実質的な窓口という形で農学研究科、保健学研究科、人間発達環境学研究科と主な事業を展開しているという形です。

(1) 地域創造研究事業

連携事業につきましては資料をみていただきたいと思います。研究員の方がフィールドに入って行っていただくのが「地域創造研究事業」です。保健関係ということで「産後のマイナートラブルの縦断調査」といった調査ですとか、古文書の調査をしていただいています。

(2) 地域人材育成事業

地域人材育成事業ということで、「実践農学入門」と「実践農学」の実習を、篠山をフィールドにさせていただいております。こちらの方は、午前中ラボの方からも説明があったのではないかと思います。この事業を篠山で実施していただいて、大きな成果をあげていると思っています。平成 20 年から開始をしております、今年で 9 年めになります。

当初はスタートだったので、できる集落でお願いしていました。今は、「まちづくり協議会」というのが旧校区ごとにございまして、そちらを受入団体として、だいたい 50 人ぐらいの学生さんを地元で受け入れていただいて、農家さんと一緒に作業していただくということを授業でしていただいています。これは大学の方が主導でしていただいていますので、うちの方は地元との調整をさせていただいているという感じです。今はもう神戸大学さんの方が地元と仲良くなっているから、自分たちで調整して次のフィールドを選んでもらっているという形になっています。

この「実践農学」に参加された方が、そのあとに地域で活動するサークルを立ち上げる、それも目指して、それを前提に神戸大学の授業プログラムを組んでいると聞いています。実際に、授業が終わった後も地域でボランティア活動をするようなサークルを立ち上げています。今のところ、サークルが立ち上がったあと活動が休止になってしまったところもあるのと、1カ所だけ今田地区は結局立ち上がらなかったと聞いていますが、学生が入ったところのほとんどはサークルを立ち上げて、地域の農家さんと一緒に農作業をしていくという形になっています。

今日、この後行っていただきます西紀南地区につきましても、平成 24 年にこういった形で授業に入らせていただいて、そのあと「にしき恋」というサークルを立ち上げて、今では篠山市内で一番大きいサークルになっています。大体 150 名ぐらいのメンバーが活動していると聞いています。地元の方と一緒に、ゆるく繋がりながら、でも核になる子たちもいるという形で活動していただいています。学生さんは、土日の授業がない時に基本的に来て作業されると聞いています。今日は事務局をされている方にお話を聞くようになっています。色々とお話していただけるかと思うのですが、自分たちで農園を持って、そこでできた野菜を売りに行き、その売り上げをサークル活動の資金に充てたりもしています。

「地域おこし協力隊」という総務省の事業があります。年間だいたい 400 万円ぐらいの助成金を受けながら地域に住んで地域課題を解決する活動をします。最終的には定住を目指していく制度です。そういった実践農学やサークルで活動した人たちがこの協力隊員になって、だいたい週 3 日は篠山市内で活動して、残りを学校に通うという形で活動されるようになった方も何人かいらっしゃいます。地域おこし協力隊を卒業した後で、篠山市内

に定住いただいている方も数名いらっしゃいます。

あと人材育成事業としては、午前中みていただいた篠山の駅ラボ事業などがございます。

(3) 情報発信・活動支援事業

情報発信としましては、年に1回地域の方に官学連携の事業を発表する機会として「地域連携フォーラム」を開催しております。ほか、市役所の各種委員会とか、地域の方のアドバイザーというところに入って、研究も兼ねて活動していただいているというようなサポートです。

5 成果と今後の展開

今後の課題と展開ですけれども、この事業がスタートしてからの大きな成果としては、神戸大学の学生さんたちがこちらにこられることで、関係人口、篠山市に関わる人口が増えているということが一番大きいと思っています。そういった形が増えることで、いずれ「定住人口も増えていけばいい」とと思っています。そういうことを考えてというわけではないのですが、農村イノベーションラボ事業は、今まで調査研究とか教育のフィールドであったのですが、今後は地域に実際に入って起業するといった形で実践していただきたいと駅ラボ事業の方も展開しています。

官学連携の事業につきましては、お配りしている篠山市が作った「まち・ひと・しごと創生総合戦略」をご覧ください。これが地方創生事業の計画で、後ろに「先駆的プロジェクト」というのが載っています。篠山市の移住・定住促進事業の一つと位置付けて、先駆的プロジェクトということで、こちらの官学連携のなかで一緒にやってきた「えきなかイノベーションラボ」ですとか、そういった事業を位置付けています。

簡単ですけれども、現在行っている事業としましてはこのような形になります。

質疑応答

○竹見聖司（篠山市創造都市課）

何かご質問があれば、よろしくお願いいたします。

○岸上光克（和歌山大学 地域活性化総合センター）

すごく簡単なところでいいですか。それぞれフィールドステーションとイノベーションラボの事務局の体制についてですけれども、フィールドステーションには先程お話があったように大学の研究員が配置されていますが、それ以外に篠山市の職員がいらっしゃるということはあるのですか。

○竹見

行政の方からの配置というのは現在のところ行っていません。

○岸上

フィールドステーションには研究員がお1人いらっしゃるのですか。

○竹見

はいそうです。

○岸上

イノベーションラボについてはどうですか。

○竹見

イノベーションラボについては、大学とは直接関係がないのですけれども、運営委託をしている一般社団法人がありますので、そちらの方で、今日説明された橋田さんが基本的にはメインで配置されています。個別のプログラムに応じて神戸大学の研究員さんが何人か関わっていただいているという状況です。

○岸上

市役所の方から誰かが出向していることはないですか。

○竹見

そこまではないです。今のところは。

○岸上

ありがとうございました。

○垣内由起子(篠山市創造都市課)

このフィールドステーションは、地域おこし協力隊の拠点にもなっていますので、協力隊のコーディネーターとか、起業に向けての支援を神戸大学の方をお願いしています。その方が週3日こちらに来られて、常駐の方と連携しながら、個々の相談を受けたりという形で運営していただいています。

○辻和良(和歌山大学 食農総合研究所)

役割分担の項目で、篠山市の役割のなかに連携事業に要する経費負担は584万円と書いてあるのですが、これのなかからフィールドステーションの駐在する研究員の人件費も出されているということですか。

○竹見

基本的にはそうです。

○辻

もう1点ですが、別途業務委託契約等を各事業において締結していると書いてあるのですが、業務委託契約する事業というのはどういう中身のものでしょうか。

○竹見

例えば、一番下のところに「産後のマイナートラブルの縦断調査」と書いてありますが、こういうことをする時の実費相当については、大学さんの方と協定し、こちらで負担をさせていただいたりしています。

○辻

こちらで予算化をされているのですか。

○竹見

そういうことです。共同でそういう調査に取り組むということで、当然大学側の方でそういう研究費を用意していただけるケースもあります。市の方の要望として、これをお願いしたいというようなこともあります。そういう年間のものを調整することを昨日やりました。「来年に向けてこういうことをやりたい」、「大学の研究員さんが今こういうことをされている」、「それはこういう研究費の事業を使って、あるいは補助金をとってきて、

独自にされているものもあります」と。市の方からは「こういう課題があるので、できれば来年に向けて、そういう研究員さん、あるいは大学の先生がいらっしゃったら、こういうものに一緒に取り組んでいただけませんか」。当然こちらから提案させていただいたのは基本的にこちらの方で負担化していく形で、大学側の方で予算化されているもの、あるいは、補助金をとってこられているものを合わせて、最終的にだいたい両者の負担が五分五分になるように、2分の1ずつ負担しています。このように私たちの方は市の皆さんに説明をさせていただいています。この他に、先程いいました地域おこし協力隊のコーディネーター料というのは、別途大学側の方に業務委託という形で200万円少しぐらいです。

○辻

地域おこし協力隊のコーディネーター料ですか。

○竹見

最初から1人で自立して、ここで全部動けるというわけではありませんし、特に学生さんもいらっしゃいますので、そういう方々の活動がしやすいようなコーディネートをしていただいたり、場合によっては、学生さんの場合は学習とか生活指導も併せて一緒にやっていたらという状況です。

○辻

わかりました。ありがとうございました。

○湯崎真梨子(和歌山大学 産学連携イノベーションセンター)

地域おこし協力隊の「半学半域モデル」というのがございますけれども、学生が地域おこし協力隊をしながら学生をしているのだと理解しました。けれども、学生の卒業した後の進路はどのような感じになっているのでしょうか。

○竹見

今までにこの半学半域パターンでやってくれたのは4人です。実績というか現在進行形も含めて4人です。そのうち1人は大学3年生の時に協力隊になろうとして、1年休学をして、フル稼働し1年めは、3年の任期になりますので、そのあとの2年は復学をして3年生、4年生と大学に行って卒論を書いて、学位をとって卒業しました。卒業する時に地域のなかで色々と、過疎地の方では教育施設がないとか塾がないということで、例えば寺子屋事業とあって、過疎地のなかで自分たちのスキルを生かして塾経営をしようとか、あるいは地域のなかで集まる機会がないから、集まってもらって話をしてもらおう時のお茶を出していくコミュニティカフェのような事業に取り組んでくれています。彼の場合はも

う少し地域のなかで福祉系の方向で地域の方に貢献したいし、自分の道も歩みたいと、現在、鍼灸師の資格をとるためにさらに勉強に行ってくれています。そういうことをしながら現在も活動を続けているという状態です。鍼灸師の資格の方はそういう活動が認められて、自分で論文も書いて提案をしたようではありますが、学費も結構優遇されていて、今行っています。最終的には篠山の方でおじいちゃん、おばあちゃんの聞き役に回ることも含めて、発達科学部の子だったのですけれども、そういうことをやっていきたいと、今事業設計を組んでくれています。

もう 1 人の方は、農学研究科の方から発達科学の理学系の方に行って、生物学の関係、特に植物関係が得意な子だったのですけれども、彼の場合は 4 年生で協力隊になって、大学院に行っている 2 年間で協力隊として過ごし、並行しながらやっていたということで、現在は自分で新規就農というか、新規就農とちょっといえないかもしれないのですけれども、有機的な農業をやっていきたいと篠山市内に住んでいます。コンサル業的なことも副業にしながら生活設計できないかなと今やっているようです。

○大西敏夫(和歌山大学 経済学部、食農総合研究所 所長)

学部 4 年の時に協力隊にですか。

○竹見

確かそうでした。勉強そのものは発達科学科の方に行っても同じような系統で、先生の関係でそう進まれたといいます。

もう 1 人は大学 4 年生の時に協力隊として入って、その時は半農半学、そのあと大学院の方に行って、そのまま進んで、これはもう半農半学のまますと経過をして、最終的には現在、篠山市役所におります。市の職員として働いております。彼ら 3 人の場合については、3 人で寺子屋の事業であるとか、コミュニティカフェ的な事業をするために、在学中、任期中に会社を一応組織化して、現在もその会社を経営母体にして、自分たちの生計も含めて、経理もきちんとやって起業して行こうという形です。もちろん公務員になった子はできませんが、そういう形で取り組んでいます。

もう 1 人は現在 2 年目ですが、京都府立大学の大学生から府立大の院に行く時に入って、現在院の 2 年目で修士論文を書きながらだと思えます。彼は最終的にはどこか他のところで就職すると聞いていたのですが、来年は大学院が終わってしまうのですが、もう 1 年やっぱりやりたいということで、主に林業関係を中心に、森林関係を中心に取り組んでくれています。2 年でもうどこかに行くのかなあということを感じながらみていたのですけれども、最終的にはもう 1 年やりたいということです。協力隊をやっている間に大分自分の頭のなかの整理ができていたり、起業プランができてきていると思っています。「半学半域」でやっているのはその 4 人ということになります。

あともう1人だけ「半学半域」ではないかも知れないのですが、大学のポスドク的な立場で研究をしながら協力隊をしてきている人が1人いらっしゃいます。今年の4月から入ってもらったのですが、その方は幸いに次のところのポストが見つかったようで、1年で任期は終わられるような感じです。

市としては基本的には協力隊は定住が大きな目的になりますので、残っていただけるのがありがたいです。総務省の方も大体6割くらいが何らかの関係で居住、残っている、あるいは関係しているといいます。例えば、そのまま篠山から離れたとしても、どこかで篠山に関わる事業をしてきていることを、全国的にも統計として6割~7割くらいと出しています。そういう意味では篠山の場合は4人のなかで3人ぐらい残ってくれているので、確率としては悪くないということです。あまり学生さんとか若い人に、最初から隊員になる時に、「これから篠山に住むんやぞ」と自分の息子にもいえないようなことをいきなり押し付けるとするのは、さすがに難しいということを考えながら、地域の皆さんや、行政でするので、議会とか、首長の方に向かっては、「できるだけおおらかな」というか「懐広い形で対応していかないと前向いていきませんよ」ということをお願いしています。

○大西

総合戦略の方の絡みですけれども、総合戦略に基づいていわゆる事業提案型でいくつか予算案もついているかと思うのです。最後のところの先駆的プロジェクトに関わって、何か新しい事業を起こされたというのは、この総合戦略はございますか。

○竹見

総合戦略で新しい事業を作っているのは、主に今日午前中にみていただいた駅ラボです。

○大西

あれが中心ですか。

○竹見

はいそうです。あちらが大きな特徴になります。先駆的事业の交付金と、それから推進交付金とを頂いてやっています。このなかに駅ラボで勉強した人、あるいは協力隊で勉強を重ねてきた人が今度は自前で住むところをみつけて、事務所をみつけたりして起業していただくということで、このなかの一番上の地域活動の拠点整備というところであるとか、そういうことをやっていただく地域での活動拠点になる自ら進んで頂いたり、事業を起こしていただくようなスペースを今年度市内3カ所で改修工事を行っています。

○大西

これを「小さな拠点」というのですか。

○竹見

イメージ的には「小さな拠点」、国交省がやっている「小さな拠点」とはイコールではないのですが、「小さな拠点」のうちの一つを形成するものということで、「地域ラボ」という形でやっております。今日、この後でみていただく北山さんのところについてもそういう拠点整備を、今日みていただく前のところに空き家があるのですが、そこをもう時間がないのですが、年度内に改修をして4月にオープンさせようとしています。そして、そこには「にしき恋」の出身者である新規就農しようとしている人に入らせていただこうと現在進めています。

○大西

話が具体的ですね。ありがとうございます。

○大西

サークルで150人といったら相当な規模なのですが、だいたい常時何人ぐらい来ていますか。

○竹見

常時来ているのは、常時みているわけではないので、ほとんど子供さんに任せていますので、駅からの送迎が大変なので、そこは市内の自動車学校にお願いしています。

○大西

それはちょっと回った時に、連絡をとったらすぐ乗せてくれるような。

○竹見

そうです。そういう協力を頂いているのですけれども、常時来ているのは週末中心に10人ぐらいというように聞いています。その子らが入れ替わり立ち替わり来ているということだと思います。今日、この後でみていただくところも地域の方が、寝泊まりできるような、寝袋を持って来たら寝れるような施設を、学生さんたちの一つのアジトみたいなところを提供して頂いています。今まで点、点と何年もやっていますから、古いところは学生さんが1回生で来られて、勉強されて、サークルを作ると、3年経つと卒業されるということで、そのなかのサークルの回転というのがなかなか難しいのです。それが大学卒業して1年、2年ぐらいの間は続いていたり、あるいは、もう何人かの人たちは新規の補充があるので、この「にしき恋」のところは、そういう組織力、組織化がうまく

いっているといいます。リーダーの問題かもわからないのですけれども、色んな方を集められて、どんどん増えていると聞いています。一方では、他のところに行く人たちを先に集めているという話も、多少そんな裏話もあるようです。1人勝ちかな、今のところは。そういう感じであります。

○辻

そういうサークル活動を通じてこちらの地元に残られた方もあるのですか。

○竹見

今日みていただく方は、話に出てくる方はそうなりますし、それから協力隊に入ってくれた人たちは基本的にはサークルから、農学実習をやって、サークルを作って、さらに篠山へ来る過程のなかで、自分も一度協力隊でやってみようかとなったようです。

○大西

基本的には自分の判断というか、自分でこれしたいということですね。

○竹見

そうです。最終的にはそうですが、先生方のサポートというのも結構して頂いているのも事実です。

○中塚雅也(神戸大学大学院農学研究科)

80人ぐらいいたら1人残っていくぐらいの割合です。

○辻

毎年50人ぐらいあるのですか。

○中塚

毎年50人ぐらい、バス1台なので40人ぐらいです。ずっと残っている人が、1年に1人というわけでもない気もするのです。サークルとしては40人のうちの10人ぐらいはサークル活動という形で次の年も来ている子たちもいて、半分から3分の1ぐらいは次の年も来て、そのなかの1人、2人が学生を終わってからも関わっているぐらいです。先ほど説明した農村イノベーションラボの橋田もそうですし、何人かいます。

○大西

将来的にはそういう子供というか、学生さんがここで定住されて、奥さんもらわれて、

子供ができるのが一番いいですね。

○中塚

そうです。

○大西

将来的には非常にいい形になるのかなと思います。まだ結婚されて定住されている方はいないのですか。

○中塚

そこまではまだいいです。

○竹見

今、中塚先生がいわれたように 40 人来てもらって、そのうち 1 人とか、あるいはサークル活動のなかからさらに絞られていくというようなことを考えていくと、幾らか声をかけるといふか、薄く広くきちんとやっとなないと、「100 人いれば 1 人当たればいいくらい気持ちでやっていかないといけない」と私どもを含めて、最初にいいました市民の方とか、行政のトップ、議員の人たちに説明をして、「最低限それくらいやらないことには、そんなに簡単ではないです」という理解をしてもらおうということが今一番大きな課題と思っています。

○大西

授業とかサークル活動を通じて、基本的には外から来られる方を受け入れるといたら、地元の受け入れ側の了見もあるのですけれども、それをある程度ゆっくり、緩やかに交流しながら、最終的には自分の判断でそこで定住するということ。だから地元としては別に違和感なしにそのまますなりと。

○竹見

そうですね。まず神戸大学というネームバリューがあって、それから過去ここにあったという縁もあるのです。そこは比較的地域の皆さん、神戸大学といえど何でも OK というような、最初からではないのですが、そういう土壌が 10 年の間には築かれてきたと思います。それから協力隊でもそうですが、農村の閉鎖性というのがあって、協力隊の子が入るといった時にも、農村実習をしたエリアとそうでないエリアによってちょっと温度差があったような気がします。慣れているところは受け入れることに対してウエルカムで、扱い方とか、接し方も慣れておられるのです。初めてのところとでは、学生さん 50 人来て頂

いて、まずは観光的に遊んでもらって、仲良くなって、サークル活動というステップを踏むというのが学生さんにとっても、地域にとってもいいと思います。そういう経験がどんどん多くなると学生さんの相手だけではなくて、最近に移住の方も結構増えていますので、そういう方に対する接し方みたいなものも地域そのものが慣れてくるようなところがあるのではないかと評価させて頂いています。農村ですから色々あります。

○大西

そうですね。それが一番のハードルです。

○竹見

学生さんというか、自分の孫みたいな形で、都会の人でもこういうものだと慣れてくると、次にちがう人が来た時も「大体わかっているよ」という感じで、空き家を貸したり、土地を売ったりということも比較的スムーズになると思います。

○辻

全然話が違うのですが、「農村イノベーションラボ事業」というのと、「えきなかイノベーションラボ」というのは、これはどういう関係ですか。事業の名前が「農村イノベーションラボ事業」と書かれているのですが、先駆的プロジェクトのなかには「えきなかイノベーションラボ」と書いているので。

○竹見

基本的には同じです。多分作った時期、これは2年ぐらい前に作っていますので、その辺の計画で作った時と、実際に動き出したところで、整合がとれてないところがありました。

○辻

事業名は「農村イノベーションラボ」で。

○竹見

そうです。基本的には同じです。

○中塚

総合戦略上の事業名は「えきなかイノベーションラボ」だと思います。そのままではないです。施設名は「農村イノベーションラボ」と。できた時に施設の名称を「農村イノベーションラボ」とつけていますが、この作った時の呼称としては「えきなかイノベ

ーションラボ」という呼称を。

○竹見

国に出した時の計画はあくまでこれで、後で愛称的ではないですけど、名前をどうしましょうといった時に変わってしまった。中身としては同じというように考えて頂いていいかと思います。

○辻

起業をすでにされた方はあるのですか。

○竹見

この前、9月23日に1期生が終了したところです。ダブっていいところをみせられないかもわかりませんが、西紀南でやっている子もこのイノベーションラボにも通いながらやってくれていたのです。その他に協力隊の子もそこで通って勉強してくれている子もいます。色々な人が集まってきているので、これからかなという感じです。

1期生が19人です。3人ぐらいの方はだいたい次に向かって起業しようという話をされています。ラボの方に来られている方も単純に起業したいと思って来ている方と、多少ちょっと知識的に勉強したいみたい形で来られている方と、それから将来的に篠山に帰ってくるのでその時にちょっと考えたいとか、色んなパターンでいらっやっています。すぐ起業されるという方は今2、3人という感じです。まだ、それも動いている段階です。

○辻

将来そういう人が増えてくる可能性が高いということですか。

○竹見

それは地域だけではなくて、大阪とか東京で別に起業していただいたとしても、その時に篠山の材料を使っていたり、あるいは篠山で学んだよということをPRしていただくだけでも、大分効果はあるのだろうと願って信じております。そこで成果がどうだと計りだすとおそらく。

○大西

そうですね。ちょっと閉鎖的になりますね。

○竹見

そうなのです。税金の使い方としてはほんとうにいいのかどうかというのはあるのです

けれども、そこまでいうとこういう事業は難しいと思います。

○湯崎

イノベーションラボの方の平均年齢はどのぐらいの方がいらっしゃるのですか。

○中塚

受講生のですか。40歳まではいかないですね。

○大西

意外と若いのですね。

○中塚

35歳ぐらいではないですか。意外と若いというよりは若い人だけをターゲットに基本的にしているのです、だから市長にいわれようが、横文字で〇〇塾と市長に言われたのですけど。

○竹見

ラボはわからないし、イノベーションもよくわからないし、みたいなの。

○辻

若い人を選んでいるというのは。採用試験ではないですけども

○中塚

受講生ですか。どうみても年をとった方はなかなか入りづらい部分があります。年配の方もいらっしゃるのですけれども。

○辻

断らないのでしょうか。

○中塚

断らないです。ただ、「イノベーションラボ」とか、「イノベーターズスクール」といって、なかも横文字がいっぱい並んでいる状態で、地元のおじいさんが来るような形にはなりづらいと思います。

○竹見

結構、京阪神からも来られています。

○中塚

一番遠いのは京丹後、今、岡山から来ています。

○竹見

そういう状況なので、なおさら懐深くしとかないと議員さんとか市民の人からの目を気にしとかなといけないのです。でも、たかが4割ですから。20人がどんどん入れ替わって4割供給できるかといったらそんな簡単なことではないのです。むしろ遠いところから来てもらっても篠山がいいと思って、逆に居着いてもらえればそれはそれで御の字ですからと思います。

○湯崎

今1年目ですけども、実績が出てくればそういうイメージのラボなのだとわかりますけれども、最初の打ち出し方を上手くなされたのですね。遠くからでも1期生が来るということは。

○竹見

それは中塚先生に大分指導いただいているところです。元々フィールドステーション、ここでやっている時に、「ルーラルラーニングネットワーク」といって、この場で30人、40人規模で勉強会を不定期に月1回ぐらいでやっていて、その積み重ねがもう10数回、20回近くあるのです。そういう時にFacebookとかSNSなんかでPRしていると、題材によっては、大阪から来ました、京都から来ましたとか、あるいは講師の先生によってそういうことがあるので、そのような蓄積は案外できていたのかもわかりません。

○大西

そろそろ時間です。お世話になりました。ありがとうございました。

付属資料

篠山市と神戸大学との地域連携事業

兵庫県篠山市創造都市課

【経緯】

- 神戸大学の前身、兵庫農科大学が篠山市にあった（～1967年）
- 平成19年（2007年） 神戸大学農学部と地域連携協定
- 平成22年（2010年） 神戸大学と地域連携協定

【目的】

篠山市全体を「生きた現場」として、大学の研究者・学生へ研究フィールドや連携先の紹介、活動拠点の提供を行うことにより、篠山市が抱える地域課題の解決と地域の活性化を図る。

【役割分担】

○篠山市の役割

- (1) 連携事業の拠点施設の設置
 - ・篠山フィールドステーションの無償貸与
- (2) 連携事業に要する経費負担
 - ・負担金 年額5,845,000円
 - ・各分野における事業については、別途、業務委託契約等を締結
- (3) 地域等との企画調整の窓口

○神戸大学の役割

- (1) 相談窓口業務
 - ・篠山フィールドステーションに駐在研究員を配置
- (2) 連携事業に必要な経費負担
- (3) 篠山フィールドステーションの活用・管理等

○主な連携先…地域連携推進室（連携事業の総合的な窓口）

- 農学研究科（連携事業の実質的な窓口）
- 保健学研究科
- 人間発達環境学研究科

【主な連携事業】

- (1) 地域創造研究事業
 - ・産後のマイナートラブルの縦断調査（健康課／保健学研究科）

- ・日置地区古文書調査（中央公民館／人文学研究科）
- ・駆除した侵略的外来生物の活用方法の研究（農都環境課／農学研究科）
- ・学生の卒業研究 ほか

(2) 地域人材育成事業

- ・食農コープ教育プログラム「実践農学入門」実習
- ・食農コープ教育プログラム「実践農学」実習
- ・学生等による地域貢献活動支援（サークル活動支援）
- ・地域おこし協力隊活動支援
- ・篠山イノベーターズスクール企画運営支援
- ・地域資料整理サポーターの支援
- ・子育て広場「ツキイチ勉強会」支援 ほか

(3) 相談・情報発信・活動支援事業

- ・相談業務、篠山フィールドステーション活用
- ・地域連携フォーラムの開催
- ・各種委員会の委員、アドバイザー、講師 ほか

【成果と今後の展開】

- 関係人口の増大→→定住へ
 - ・農村イノベーションラボ事業
 - …調査研究・教育のフィールド→実践のフィールド

◇データで見る篠山市◇

【土地・気象】

- 総面積 377.59 km²(東西 31.4 km、南北 24.7 km) ●最高点 793.4m(御嶽)
- 位置(市役所) 東経 135° 13′ 北緯 35° 04′ 海拔 205m
- 気象 年平均気温 13.9℃ 年間降水量 1605.5 mm

【人口】

- 総数 42,696 人(男 20,507 人、女 22,189 人) ●世帯数 17,147 世帯 ●人口密度 113.1 人/km²
- 高齢化率 32.25% ●出生率 7‰ ●死亡率 14‰ ●婚姻率 15.3‰ ●離婚率 3.0‰

【産業別就業人口】

- 第一次 2,590 人(12.7%) ●第二次 5,610 人(27.6%) ●第三次 12,122 人(59.7%)

【観光】

- 観光客数 2,345 千人(日帰り客数 2,225 千人、宿泊客数 120 千人)

【都市計画区域】

- 篠山都市計画域 34,995 ㊦ 市全域に対する割合 93%

【道路・橋りょう】

- 道路総延長 1,108.4 km(国道 63.9 km、県道 211.1 km、市道 833.4 km)
- 橋りょう総数 1,091 総延長 12,799m

【都市公園】

- 総数 18 箇所 ●総面積 772,097 m²

【農業】

- 耕地面積 4,400 ㊦(田 4,190、畑[普通畑、樹園地、牧草地]204)
 - 農業振興地域 8,789 ㊦
 - 農家戸数 3,775 戸(専業 868、1種兼業 197、2種兼業 1,741、自給的農家 969)
 - 主な作物の栽培面積
水稲 2,182 ㊦ 大豆 648 ㊦ 小豆 51 ㊦ 山の芋 43 ㊦ 枝豆 160 ㊦ 乳用牛3頭 肉用牛 1,300 頭
- [資料:農都政策課調べ(平成 28 年度 8 月)]

【森林資源】

- 森林面積 28,183 ㊦ ●林野率 74.63% ●民有林面積 27,677 ㊦ ●人工林率 28.0%

【学校園】

- 保育所 4 ●幼稚園 12 ●認定こども園 1(私立2) ●小学校 14 ●中学校 5
- 特別支援学校 1 ●高等学校 3

【文化財等】

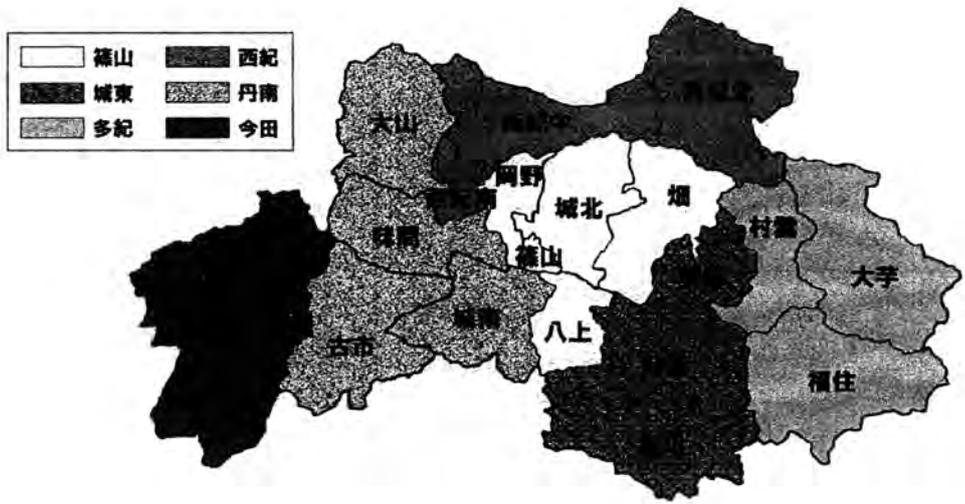
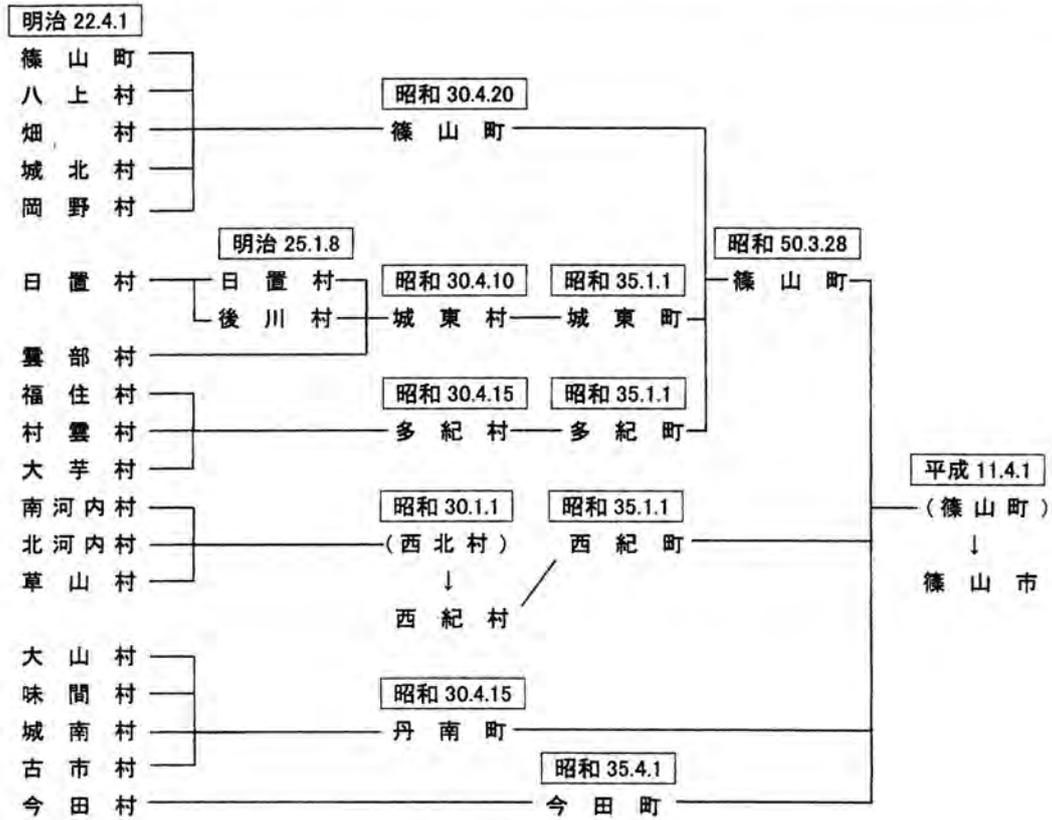
- 有形文化財 164 ●無形文化財 1 ●有形民俗文化財 3 ●無形民俗文化財 10
- 史跡 17 ●名勝 1 ●天然記念物 15 ●重要伝統的建造物群保存地区 2 ●陵墓参考地 1

【財政】

- 平成 29 年度当初予算一般会計 216 億 7,200 万円(対前年度比 1.0%減)
- 実質公債費率 19.8% ●将来負担比率 191.7%

[資料:篠山市統計書(平成 28 年度版)]

【沿革】



篠山市

人口ビジョン／ まち・ひと・しごと創生総合戦略



篠山市
平成 28 年 3 月

篠山市人口ビジョン

策定の意義

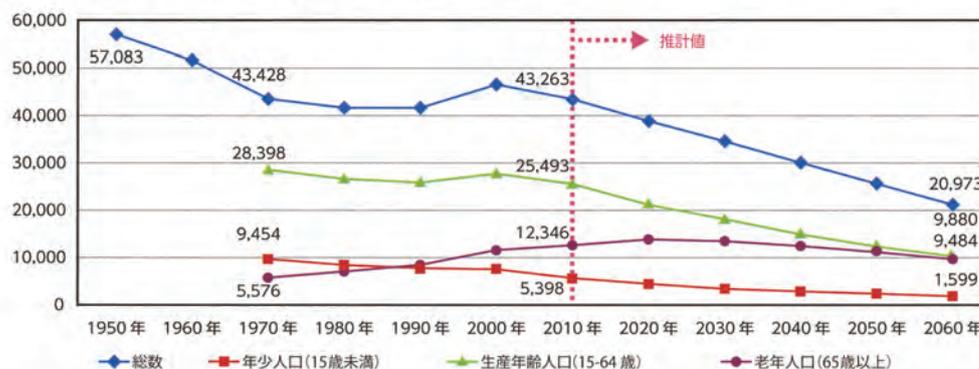
篠山市人口ビジョンは、市民と行政が今後の篠山市の人口減少問題や地域課題等を共有し、市民が主体的に地域課題の解決に向けた行動を起こすことを目的として策定するものです。当ビジョンにおいては、人口の現状分析や市民、特に若い世代の結婚・出産、就労等への意向を踏まえ、人口減少の要因を整理するとともに、それらの要因を解消した場合の推計人口を、篠山市の将来人口展望として示しています。

篠山市の人口動向

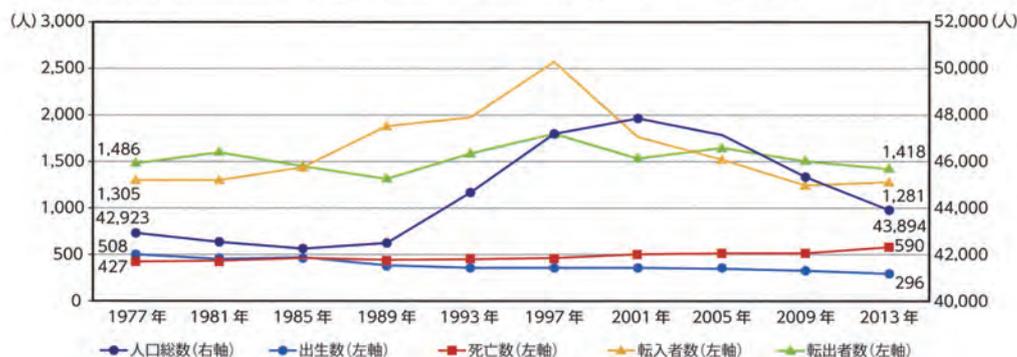
◎篠山市人口動向のポイント

- ・総人口は1980年以降増加傾向にあったものの、2000年をピークに減少に転じ、その後も減少予想。
- ・1985年～2001年頃までは転入超過傾向であったが、近年は転出超過傾向。転出者の年齢層は10歳代後半～20歳代前半に多い傾向にあり、転入者については、子育て世代（30歳前後）が少なく、高齢層（60歳前後）が多い。（詳細は本編を参照）
- ・合計特殊出生率は近年減少傾向にあり、2008～2012年は0.12ポイント上昇し、兵庫県より0.1ポイント高い1.5となっている。
- ・高齢化の進展を受けて、自然減少の傾向は年々増大している。

◎総人口及び年齢3区分別人口の動向



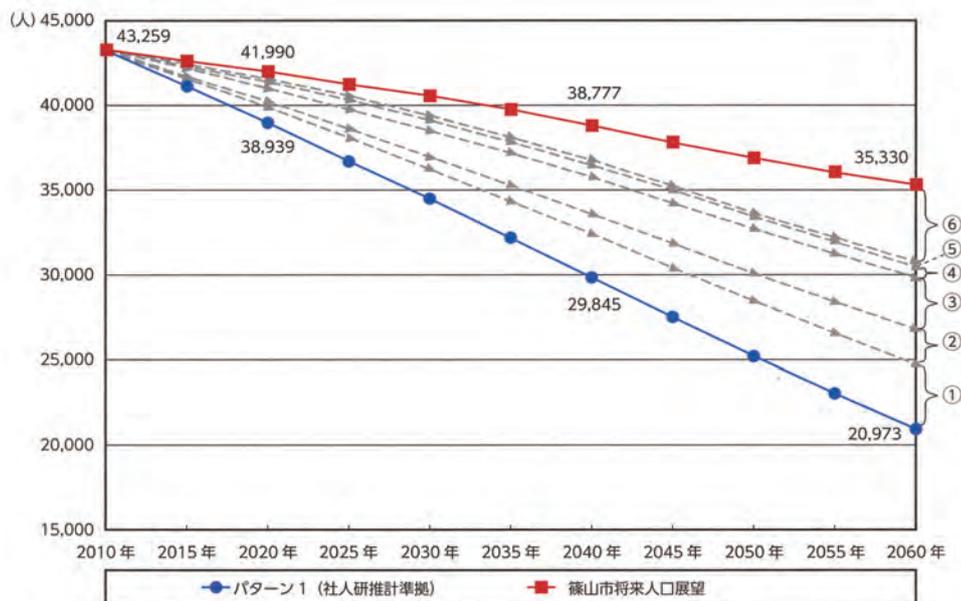
◎社会増減数（転入・転出者）、自然増減数（出生・死亡者）の動向



篠山市の将来人口展望

将来人口の展望にあたって、本市の人口動向を踏まえて、現在の人口減少傾向を改善させるための「6つの視点」を設定し、それぞれに対して効果的な施策を実施したと想定します。それらの施策効果として具体的な仮定値を設定し、篠山市の将来人口展望値を算出すると以下の通りとなります（算出根拠は以下表の通り）。人口減少の抑制に関する施策を講じなかった場合の仮定値（パターン1：社人研推計値）と比較すると、将来人口展望値では、2060年時点で約1.4万人の人口減少抑制効果が現れていることが分かります。そこで、2060年における篠山市の将来人口を35,000人程度と展望します。

◎篠山市将来人口展望



◎人口減少抑制効果の内訳

- 視点①：若い世代にとって魅力ある雇用の場の創出による、若者の転出抑制**
…▶ 高校・大学卒業世代のうち約半数が転出せず、市内に定住すると仮定
- 視点②：若者世代をターゲットとした移住施策による、若い世代のU・Iターン促進**
…▶ 30人/年の若者がU・Iターンで市内に転入すると仮定
- 視点③：子育て世代施策の充実等による、子育て世代のU・Iターン促進**
…▶ 2015年時点で約50人/年の子育て世代が市内にU・Iターンで転入すると仮定
- 視点④：元気な高齢世代をターゲットとした移住定住施策による、移住・定住の促進**
…▶ 2015年時点で約50人/年の高齢世代が市内にU・Iターンで転入、定住すると仮定
- 視点⑤：市民主体の健康づくりによる健康寿命の延伸**
…▶ 高齢世代の生残率が平均寿命日本一の長野県の水準まで上昇すると仮定
- 視点⑥：子育て支援の充実による出生数の増加促進**
…▶ 出生数が毎年約310人に維持されると仮定

篠山市まち・ひと・しごと創生総合戦略

策定の意義

篠山市まち・ひと・しごと創生総合戦略（以下、総合戦略）は、「篠山市人口ビジョン」で示した地域の将来人口展望を踏まえ、今後5か年のまち・ひと・しごと創生に関する施策の方向等を提示するものです（計画期間：平成27（2015）年度～平成31（2019）年度）。市民や事業者、行政等が一体となって、人口減少の抑制に向けた取組を進めるためのガイドラインとして活用します。

基本理念

篠山市は、恵まれた自然・歴史文化を有する「創造農村」であり、それでいて京阪神に近接し住みやすく、緊密な地域コミュニティを有する、優れた暮らしの環境があるまちです。総合戦略においては、第2次篠山市総合計画の「幸せは篠山の暮らしの中にある」という考え方や、近年の日本遺産の認定やユネスコ創造都市ネットワークへの加盟などに代表される、農の営み、まちなみ、デカンショ節、丹波焼など文化や自然環境を大切に育み、継承しながら新たな発展を模索する姿勢を受け継ぎ、日本の原風景と誇れる景観やふるさとの豊かな自然を守り、創造的な農の都として「篠山」のブランドに誇りを持ち、「篠山」でこそ実現できる市民一人一人の幸せを未来へつないでいくことをめざし、基本理念を以下のとおり設定します。

篠山の希望を未来につなぐ

—「篠山」だからこそ実現できる創造的な農村の幸せ—

篠山市がめざす、市民が「幸せ」と感じられるまちづくりとは、地域のつながりが希薄で、利便性や経済性を追求した都市的まちづくりではなく、「農」を基盤として「歴史」や「文化」、「自然環境」や「地域のつながり」を大切にしまちづくりです。

篠山市内19地区においてまちづくり協議会や自治会など、市民主体のそれぞれの取組を積み重ね、多様な取組を地域内・地域間で共有することで、篠山市のまち・ひと・しごとの、創造的な循環を生み出し、地域の実情に即した市民の幸せな生活を実現します。これらの取組を積み重ねた成果として、全国に、世界に向けて「21世紀の持続可能な都市発展のモデル」となることをめざします。

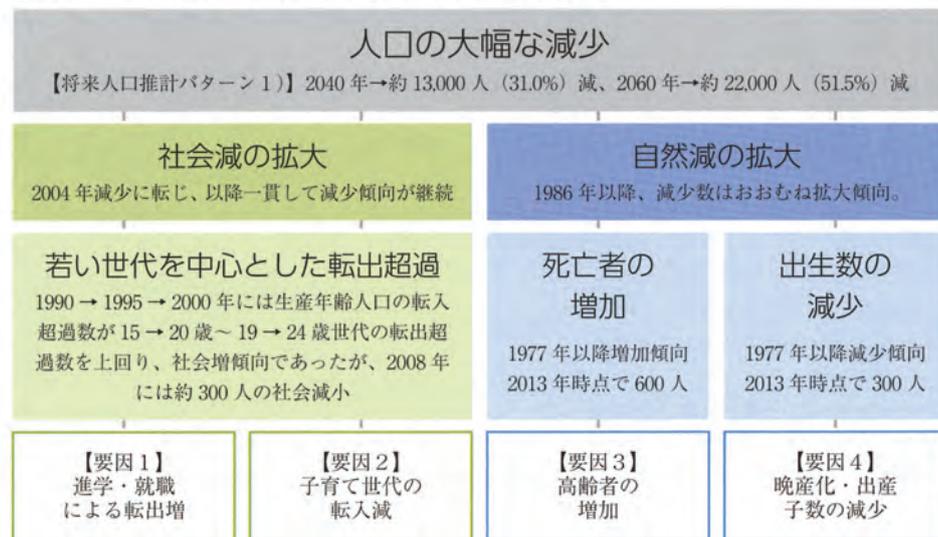
基本理念にもとづき、以下4つの基本目標を設定し、篠山市のまち・ひと・しごとの創生に向けて、戦略的な施策を実行します。

1. 暮らしに結びついた創造産業を興す
2. 日本遺産の魅力を活かし新しい人の流れをつくる
3. ふるさとの豊かな環境の中で子育ての文化を育てる
4. 安心して豊かな暮らしを自分たちの手で創る

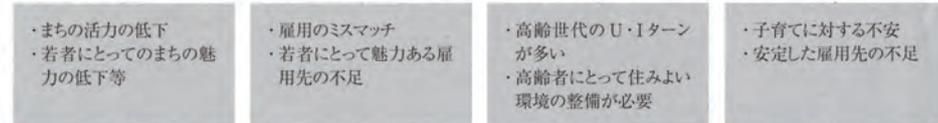
篠山市人口ビジョンと総合戦略の関係性

篠山市総合戦略の策定にあたって、篠山市人口ビジョンにおける分析の結果明らかとなった「人口減少の要因」、及び市民アンケート等による「人口減少の背景」の分析を踏まえて、人口減少抑制に向けた「6つの視点」を設定し、それらに対応するように総合戦略の「4つの基本目標」を掲げています。

◎人口ビジョンにおける人口減少要因の分析



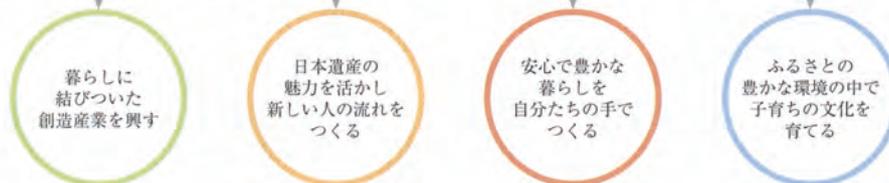
◎市民アンケート等による人口減少の背景分析



◎人口減少抑制に向けた6つの視点



◎篠山市まち・ひと・しごと総合戦略 4つの基本目標

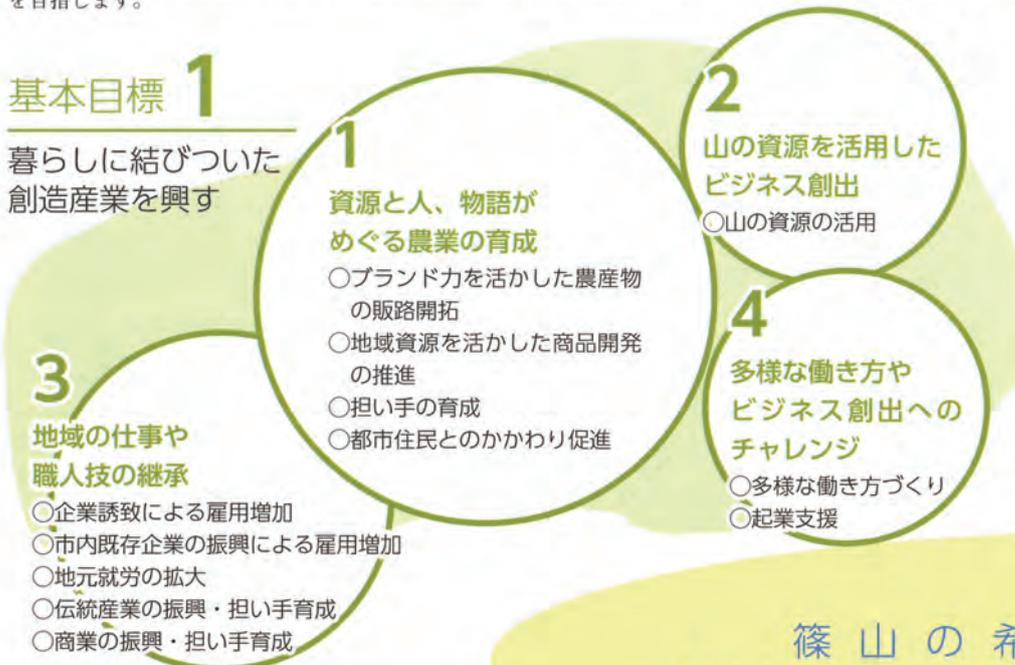


施策体系

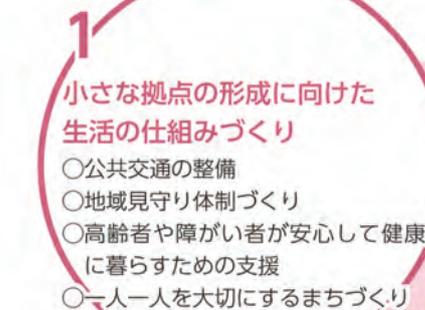
製造業・サービス業など今ある産業の活力を興し雇用を増やすこと、企業誘致や起業の支援を行うこと、農業・林業等昔からある産業の担い手を確保し、地域の資源を維持していくことを通じて、U・Iターン者がしごとを創り出すことを応援し、これらすべてを篠山市民の暮らしに結び付いた「創造産業」として発展させることを目指します。

基本目標 1

暮らしに結びついた
創造産業を興す



基本
篠山の希望を
—「篠山」だからこそ実現



基本目標 4

安心で豊かな暮らしを
自分たちの手で創る



地域の若者が流出し、集落構成員が高齢化する現状の中、地域での暮らしを支えあう仕組みづくりにより、住民がいきいき暮らせるまちづくりを推進することが求められています。将来的には、各地区が地区の人口に見合った、自立した地域づくりを営んでいけることを目指し、「小さな拠点」の整備に向けた生活の仕組みづくりをはじめ、美しいまちなみや豊かな自然環境の保全を通じて、住民が誇りを持って住み続けたいといえるまちを目指します。

地域の人口維持や活力の維持に向けては、通勤しやすい環境づくり等を通じて若者の転出抑制を図ることはもとより、日本遺産の認定を受けた篠山市の魅力を活かし、観光から「篠山ファン」を増やすことを通じて、移住・定住につなげるのが重要です。着地型観光を通じて地域の賑わいや経済を活性化させまちを興すとともに、「篠山ファン」が関わり続けられる仕組みをつくっていき、移住・定住につなげる施策を展開します。

1

**地域の伝統文化を活かした
着地型観光の推進**

- 日本遺産を活かした観光まちづくり
- 外国人観光客の誘致
- 人材育成
- 交流促進
- 情報発信
- 観光客が長時間滞在するための取組

基本目標 2

日本遺産の魅力を活かし新しい人の流れをつくる

2

**篠山に関わり続け
やすい体制の整備**

- 「篠山ファン」等を定住につなげる仕組みづくり

3

交流人口を定住人口へつなげるための取組

- 空き家活用
- 住もう帰ろう運動

理念

未来につなぐ
できる創造的な農村の幸せ

2

しごとと子育ての両立

- 子育てのサポート体制充実
- 健康な子育てのための地域医療の充実
- 医療費負担軽減
- ◎多子世帯の負担軽減

3

**結婚・子育ての情報
が集まる場づくり**

- 篠山市での結婚・子育てへの意識醸成
- 豊かな子育て環境のための連携体制づくり
- 親・子どものふれあい創出

1

ふるさと教育のさらなる充実

- 学校・家庭・地域・行政で取り組むふるさと教育
- ふるさとの自然を愛する教育の促進
- ふるさと篠山の食育促進
- ◎就学・通学の援助

基本目標 3

ふるさとの豊かな環境の中で子育ての文化を育てる

結婚に対する価値観の多様化や、ワークライフバランスの難しさ、安定した雇用が不足しているという意識が、結婚や出産・子育てへの障壁になっています。子育て世代を金銭的、人的、精神的に支援することや、子育てができる働き方を促進します。市内外の人々に、篠山市で子どもを産み、篠山市の「子育て」を大切にすふるさと教育のもと、「篠山市で子育てがしたい」、「篠山市で学びたい」と思ってもらえるまちになることを目指します。

先駆的プロジェクトについて

それぞれの基本目標に位置付けた具体的な取組のうち、本市の創生における先駆的な項目については、「先駆的プロジェクト」として、基本目標を横断しながら重点的に取り組みます。

「先駆的プロジェクト」の推進に当たっては、人材育成拠点「えきなかイノベーションラボ」、および、地域資源を生かしたソーシャルビジネスのチャレンジの舞台となる「地域ラボ」を新たに整備します。

「えきなかイノベーションラボ」は、若者実践家の発掘と育成、起業・経営支援、地域活性活動の調査研究等を行う場として、本市の玄関口である篠山口駅構内に整備します。農業振興や観光振興、まちづくり、子育て支援など、総合戦略の基本目標を網羅する学びを得られる場とするとともに、若い世代をターゲットにした移住体験を提供する移住相談窓口や、着地型観光支援組織の取組の拠点としても位置付けます。

「地域ラボ」は、「えきなかイノベーションラボ」でソーシャルビジネスを学んだ実践家が活躍する場として、市内19地区における空きスペース等を改修し、オフィス等として整備します。最終的には、交通や医療、買い物等生活サービスの維持に関わる地域課題等に対応できる「小さな拠点」として発展させ、また地元の若者の起業マインドを呼び起こすきっかけをつくり、地域の活力維持につなげます。

「先駆的プロジェクト」の推進により、雇用のともなった移住・定住促進施策を展開し、起業後もビジネスプランナーの活動を支援することで、篠山の地域ブランドを活かした農林業の振興や観光まちづくり等、篠山市の強みを活かした創造産業の発展につなげます。

「えきなかイノベーションラボ」と「地域ラボ」の連携を通じた篠山市の地方創生



*イノベーション…今まで常識とされ、誰も疑いを持たなかったことに対して、多様かつ新たな見方や解決策を提供することで、新しい価値を生み出し、社会的に大きな変化を生み出すこと。

総合戦略の推進体制

地域の担い手である市民をはじめ、地域団体組織やNPO組織、民間事業者、多様な主体が行政との協働により、地域が将来にわたって持続的にあり続け、住民が希望と安心をもって暮らしていくためのまちづくりを推進します。

市民一人一人が自分の住む地域の将来を考え、小さくても「できること」からまちづくりの活動等に参画することにより、それぞれの幸せを実現することを通じて、地域の希望を未来につないでいくことが期待されます。行政は、市民等の活動を支援するとともに、協働を図り、様々な分野において、全庁的に相互連携を図りながら計画を推進します。

西紀南まちづくり協議会の活動・成果と課題

西紀南地区まちづくり協議会
事務局長 北山 透

北山です。よろしくお願ひします。皆さんはじめまして。遠いところ篠山までお越しくださいまして、本当にありがとうございます。

ただいま紹介にありましたように、「西紀南まちづくり協議会」ということでもう 9 年になります。地域の活性化、あるいは地域を生き生きと、そして地域の人々と交流を密にしようという目的からこのまちづくり協議会というものを発足いたしました。

私どもはまちづくり協議会といいまして、篠山市では小学校区単位にまちづくり協議会ができています。篠山市は小学校が 19 ございました。地域によっては人口が減ってきて子供も減ったので統廃合があつて、今は小学校が 13 でしたかね、確かそのくらいになったと思います。旧のまだ 19 小学校があつた地域単位でまちづくり協議会ができていますので、現在は 19 まちづくり協議会が篠山市内にございます。その一つとしてこの西紀南小学校がありまして、そこで一つの校区としてまちづくり協議会ができています。これが私たちの西紀南まちづくり協議会です。

概要をパワーポイントで作っています。「にし恋」と「まち協」との交流、あるいは都市部の方々の交流といったものも、まち協で行っています。このパワーポイントに沿って簡単にご案内をさせていただこうと思います。

1 西紀南地区の現状

この西紀南地区というのは、篠山市全体のなかからみますと、西の方に位置しています。ここが篠山盆地です。その盆地の西の方で、この地域には田畑が結構ございまして、盆地のなかでも開けた地域になっています。そのなかでお米、それから川北黒大豆といいまして黒大豆の本場になっています。江戸時代からここ篠山では黒大豆が生産されて、この川北というところが中心となって作っています。今、黒大豆の枝豆というのも結構人気があつて出ています。本当の主産地というのですか、この川北西紀南地区に位置するところで育てられています。ちょうどこの 10 月が、黒豆の枝豆の出荷真っ最中で、農家さんは忙しい日々を送られています。

ここは交通の便でいいますと JR の福知山線、大阪から福知山まで行っている路線ですが、その篠山口という駅がすぐ近くにあります。舞鶴若狭道という自動車道もちょうどこの西紀南地区を走っています。この地区にサービスエリアがありますので、サービス

エリアのお客さんにもこの地域の黒豆を賞味していただけるということで、立地的にもいいところとっております。

交通のアクセスは非常に良いところで、企業もいくつかこちらの方に入ってきています。若い人は企業が集中する都市部へ仕事に行かれるので、昼間は人口がどうしても都市部の方、都市部の方に行っていて、昼間は高齢者の方、お年寄りがいるという地域になっています。それと、大阪まで1時間ですので、通勤にも便利だということで住宅をこちらに構えて住む方も徐々に増えてきているのですが、先程もいいましたように昼間はお年寄りの方が多いということです。農家さんも「歳いって、もう農業ができない。もう人に預けよう」、あるいは「大規模農家さんに作ってもらおう」という形で農業も衰退してきているといえるかと思えます。そういった意味で農地の維持、管理が徐々に難しくなっているかと私どもは考えております。

2 まちづくり協議会の意義

まちづくりとして、私たちは今後どのようにしたらいいのだろうということで、「住んでよかった」、あるいは「住んでみたい田舎のまち」という将来像を考えました。

住民から「私たちはこの地がいいよ」という意識を持ってもらう、そして「都市部の方もここがいいよ」と思ってもらえるような地域づくりをやっていきたいと考えて、まちづくり協議会が発足して、ここの「みなみ・ほっと・サロン」という拠点を作りました。

3 西紀南地区の位置

みにくい地図ですけれど、篠山というのがちょうどこのエリアになってくるのです。周りを山に囲まれて、ここが篠山盆地です。こちらが東で、こちらが西です。篠山市全体からみますと、西紀南地区は西の方に位置しています。

拡大してみますと、これが西紀南地区のエリアになりまして、盆地のなかでも開けた地域になっています。先程もいいましたが、舞鶴若狭道が福知山方面、舞鶴方面に向かっていきます。こっちが大阪方面で、ちょうど西紀南地区のなかに西紀サービスエリアという自動車道のサービスエリアができています。ここの特産品をこのサービスエリアで販売しています。PR的にはいい位置にあると私どもは思っています。

4 地域内でのまち協の活動

これはまち協としての活動です。この辺りはさっと流させていただきます。まち協としては地域の交流・活性化という意味で毎年色々な事業を考えているのですが、地域の多く

の方々に集まってもらって「ふれあいの集い」を毎年行っています。そのふれあいの集いのなかには必ず防災訓練を入れて、運動会的なものを入れます。そのなかには防災運動会という防災に関わる運動会、例えばバケツリレー的な競技をしたり、あるいは担架運び競争とか、それから障害物競走とって、例えば震災で瓦礫になったその間を通り抜ける、そういったものを仮想で作って障害物競走をやったりしています。

それと地域散策ウォーク。「自分が住んでいても知らない所が結構あるね」という住民さんの意見があったので、年1回参加者を募集して、自分たちが自分たちの地を知るということを目的に散策をする「地域散策ウォーク」というイベントをやっています。

5 まち協としての優先取り組み

私たちの取り組みの一番の重点課題は、「地域の定住化」です。これは全国的にどこでも都市部に人口が流れて、どうしても郡部の方は過疎化、あるいは人口が減少になっています。地域に活力を与えるためには人がいるというのが一番ですので、定住ということを目的に考えて私たちは取り組んでいます。

それと一方では、地域の自然とか環境を守っていかなくてはいけないということから、維持・継承も考えていきます。そのなかで地域定住に繋がる手段として、後ほどご案内させていただきますけれども、色んなことを都市部の方と交流しております。それと学生たちとの交流、これが今回皆さんにお話をさせていただきたい交流事業と思っています。

6 都市部の方々との交流事業

都市部の方々との交流ということで、この地域内で農業を中心としてボランティアをしていただく方を募集して、現在5年目になっております。都市部の方に月1回ですけれども、こちらの方に来ていただいて、いろんな農作物を作る農家さんのお手伝いで参加していただいています。5年間続いて、今も参加してもらっています。「収穫する時にはこう収穫するのですよ」と指導したり、あるいは、そういったボランティアに来ていただいた方とまち協の人とで定期的に交流会を開いてお話をしたりしています。

先程いいましたように、ここは黒豆の特産地でありますので、黒豆の栽培から収穫までを一貫して都市部からボランティアで来ていただいた方に経験していただきます。こういった黒豆の植え付けから、収穫までには枝に土寄せをしたり、草刈りをしたりとか、そういった作業も都市部の方に来ていただいて一緒にしていただいています。今がちょうど繁忙期になっているのですけれども、販売のところもお手伝いをしてお客さんに提供していただいたりもします。

また、ボランティアで来ていただいた方が自分たちで農家さんのところでお手伝いをし

て育てた野菜をいただいて、その野菜を料理して食事会をするということもしてもらっています。

これは昔ながらの稲刈りですけれども、そういった稲刈りをしている農家さんもいらっしゃいますので、そこでお手伝いをして汗を流してもらおうというようなボランティアもいただいています。

こういった形で月1回の周期で毎月当地に来ていただいています。だいたい平均6名から10名程度です。この成果としては、篠山の自然、あるいは農業の大切さを感じとっていただくというところです。

参加された方にご意見を聞かせていただくと、「本当にいいところだ」、「こんなところにできたら住みたい」という言葉もいただいているのですが、「住もう」となってくると金銭面とか、色んな面も関わりますので、そういったところがなかなか即という形にはなりません。気持ち的にはそう思っているということなんです。

参加の皆さんには、先程もいいましたけれども、ボランティアを経験して住んでみたい土地候補として評価はいただいているというところです。

7 学生たちとの交流事業

これから本題に入ります。学生達との交流ということですけど、この西紀南地区に神戸大の学生達に現在ずっと来ていただいています。この西紀南地区で学生達がどのように交流、あるいはなかに溶け込んでやっていただいているか、といいますと、まずは農作業、農家さんのところへ行って農作業のお手伝いをする。それから各地域にお祭りとか、何かイベント、地域の運動会というのがあったら、そこに積極的に参加してもらったり、そういったところで地域と交流を図ってもらっています。

「にし恋」と略して簡単にいいます。神戸大のなかでサークルが発足したのですね。それが「にしき恋」という名称です。この名称の由来は、大学生に聞きますと、この地域が西紀南ですけれども、「西紀」という旧来の地域になります。名称がその「西紀を恋する」ということで、「みんな大学生自身が西紀を恋しようよ」という意味での恋と、「みんな神戸大学の学生、西紀へ来い」と、「こっちへ来い」という意味も含めた、ちょっと言葉を掛けているみたいです。そういう意味で「にしき恋」という名称をつけたと聞いています。それが平成25年からずっと毎年来てもらっているのです。

ここのサークルが発足した一番の最初の要因は、篠山市は神戸大学と市が提携して、大学の一つの授業の一環で、「実践農学入門」という農学部の一つの実践的な学習の一環として、この篠山の地に来てくれております。それがもう7年になるのですが、その時に杵本先生がここの篠山と関わっておられまして、ここの西紀南地区と神戸大と実践農学入門という授業の一環を色んな意味でコーディネートしていただいたということが一番

このサークルができた発端です。その授業を受けたなかの7人だったのですが、その7名がその授業を受けて1年が終わって、そのままこの地域と関係が薄れるのは何か寂しいということで、自分たちもこの西紀の地でお世話になった方々と引き続き交流を図りたいということから、「にしき恋」というサークルを発足して、それから延々と西紀南地区と交流をしていただいているということです。それがこのサークルの発端で、それが今でもう6年目になっています。

最初は7名だったのですが、現在はサークルの登録されている人数が130名ということで、年々膨らんできている状況になっています。メンバー構成として、当初は農学部だけだったのですが、今では農学部だけではなく、海事科学部、発達科学部、理学部、文学部、法学部、医学部、昨年度で全学部を網羅したと「にしき恋」のメンバーはっています。神戸大学の全学部から1人か2人必ずどこかにいて、農学部の学生が一番多いのですけれども、その色々な学部の登録している学生さんが現在130名、今年の新入生を入れて130名となっています。活動は土曜、日曜をメインとして毎週来ているのです。毎週この地に来てそういったボランティア活動をやってきています。

8 主な活動

活動としては農業ボランティア、あるいは後ほど紹介をしますが、「にし恋ファーム」という活動です。こちらの農地をお借りして、自分たちで農作物を作って、作った作物を自分たちで販売ルートをみつけて、そこへ販売しています。生産から販売までを彼らが実践してやっているということも活動の一環になっています。それから地域活動、例えば先程いいましたように地域の運動会、あるいは地域のお祭りにも参画しています。今や地域から来て欲しいという呼びまでかかるような状況で、非常に地域に溶け込んだ活動をしてきています。

それからもう一つは、里山整備です。この地域は盆地ということで周りは山に囲まれています。そういった意味で、山に関わる里山整備にも彼らは関わってくれて、その地域で「ちょっと雑木が増えたので雑木刈り手伝ってくれへんか」といわれたらそっちの方にお手伝いにいたり、あるいは、そこの里山をどのようにこれから先に守っていけばいいかというような案も考えてきています。その一環で、このような「学生の考える里山の今後」ということをパワーポイントで作ってくれて、地域の方々にも説明をしてくれたりもしています。

それと他団体との交流ということで、これはここの学生が神戸大学だけじゃなく他の大学生も一緒になってこの地域に入ろうと、他の大学にも声をかけて、他の大学生もここに来て一緒にボランティアをしてきているという広がりを見せてきています。

9 学生が農業ボランティアを通じて得るもの

この農業ボランティアというのは、学生と当地の農家さんとどういった関連性、あるいは影響があるのかということ考えた時に、学生は若い労働力とか活力を農家さんに与えてくれて、そして、農家さんは学生にお年寄りの知識、あるいは田舎独特の温もりを学生達に伝えたり感じてもらう、というお互いの繋がりができている、と私は思っております。

学生がいうには、にしき恋のメインとなる活動は「黒豆のことを知りつくした農家さんのお手伝いをして豊富な実践的知識を得る、あるいは吸収する」ということです。学生がここの農家さんと交流することによって、本当にいい意味で、「自分たちは吸収ができる」という声を聞かせてもらっています。それは個々の気持ち、判断で色々な思いがあると思うのですが、皆さんいわく、「田舎で農家さんとおしゃべりしたり、空気を吸って田舎料理をよばれたり、これが何ともいえない」ということで、毎週来てくれるメンバーは「街で、神戸や大阪で遊ぶよりもこっちに来る方がよっぽどいい」という声も聞かせてくれてます。非常にありがたいと私どもも喜んでおります。

10 西紀南地区が学生との交流で得るもの

学生との交流で得るものということで、この地域の住民の方々が「どのような気持ちで」、あるいは「得られるものがあるのだ」とお聞きしてみますと、「学生達の元気な声を聞くのが一番の元気がもらえる」と、それと「学生がにぎやかな声で動き回っている」というのが、高齢化になるとどうしても昼間は大人の顔ぶれしかみえないのが、そのなかに若い学生がみえて、畑に行って一生懸命大声を出してやっているというのが、それが「いいな」という声を聞かせてもらっています。

高年齢の農家さんにとっては若い人の労働力というのは非常に助かるといいます。「年寄りだからもう私は農業やめたい」というのも、「学生が来てくれるから何とか頑張ろうか」ということで、やめようという気持ちだった農家さんが学生が手伝いに来てくれることによって、また頑張るという気持ちになってくれるというように聞かせてもらっています。

それと、「学生の知識」、あるいは「学生の発想」が、ある意味農家さんは硬い昔ながらの農業の意識があるのが、学生のひょっとした発想とかヒントが「ああ、そんなやり方があるのか」とある意味いいアイデアがもらえて、「それを一回やってみようか」という気持ちにもなれる、ということも聞かせてもらっています。

先程いった里山の整備については、「非常に彼らの力が役立つ」、「やっぱり若いから元気だ」、大人がフーフーいって一生懸命やっても「学生はやっぱりパワーがある」、「動きが速い」、「整備のなかで非常に助かります」という声を聞いています。

11 にし恋farm

ここの写真は、そういった交流の場面ですけれども、学生達とここのまち協の役員との意見交換会、それから地元の若者とも溶け込んで色々と話をしたりしてくれています。

それから「にし恋ファーム」といまして、これが彼らが借りている農地です。そこで自分たちで黒豆を作ったり、あるいはお米を作ったり、野菜を作ったりと、自分たちで育てて、生産して、それを自分たちの食料にしたり、あるいは販売したりしています。神戸大学農学部は農業を实践できる場所があるのですけれども、そういった学業、勉強ではなく「自分たちで本当に自由にできる農地というのが本当に楽しい」というのです。それと、農学部でない学生も農業に携えるので、「非常にこれがいい」と学生達がっています。これが今ちょうど各農家さんがやっている作業です。黒豆は枝付きで豆のさやが付いて束にして販売している商品と、それから枝のさやだけをとって袋詰めにした商品と2種類あります。これはちょうどここにありますが、枝とさやが付いた1キロの束、この一つを作っている、その家庭のお手伝いをしているところです。

これは学生達が「にし恋ファーム」と、にし恋が自分たちの農場だと書いているところです。現在21aの田んぼを二分してお米と黒豆、もう一つ農地を借りて、12aの畑もお借りして黒豆と野菜を作ったりしていて、全部で33aの農地を彼らが作って、育てたりしています。彼ら皆、非常に楽しんで作物づくりをやっています。生産としては、こちらのお米、コシヒカリを中心として作っています。それから夏野菜、それから先程いった丹波の黒大豆、冬になってくると、種まきを10月からやっていた冬野菜。学生はここで作った作物を販売というところまでやって、また地元との交流といった部分と二面性を持ってやってくれています。彼らにとってはまさに実践農学ということ。農家さんと一緒にやっていますので、畑を耕したり、あるいは時には機械を使わせてもらったりと、本当に農業を实践でやっています。野菜作りも農家さんに指導を受けて、「こうするのだよ。ああするのだよ」というのを聞いて、それを自分の農地で作ったり、あるいは大学で農学部の学生は授業で受けたり、実践でもやっていますので、それをうまくこのにし恋のメンバーに指導して野菜を作ったりしていると聞いています。

12 地域に密着した交流

学生達は地域に密着した交流として、小学生、特にこの西紀南小学校区の小学生との交流で、地域の生態系の勉強とか、あるいは小学校では出前授業を行っています。小学校も非常に歓迎してくれています。必ず年1回、あるいは2回の時もありますけど、小学校の授業の一環のなかに学生が入って、普通の勉強を教えるのではなく、これからの将来像というようなことを子供たちと色んな会話をしながら進めていると聞いています。給食も一

緒に食べたりして、和やかに交流を図ってくれています。

この写真は、タケノコの時期になるとタケノコ掘りもあるのですが、竹林整備も兼ねて彼らが協力してやってくれています。

これは地元の夏祭りで、夏のお祭りには女性は浴衣を着て一緒に夏祭りに参加したりしてくれています。先程いった小学校の交流ですけど、給食も一緒に学生が食べたりしています。また秋祭りには神輿を担ぐといったお手伝いもしてくれています。竹林整備とか、先程いった里山整備の発表も彼らが地域の方々に説明してくれています。

13 学生の地域情報の発信

これは学生達が地域情報の発信として、先程いった黒枝豆とかそういったものを、自分たちで包装のデザインも考えて、自分たちで作って、梱包して、そして神戸とか阪神間のマルシェに商品を自分たちが並べて、自分たちが販売するという事もやっています。また、神戸大学のなかでも自分たちが作った黒枝豆を販売したりしていると聞いております。全てこういうデザインは彼らが考えたデザインで売っていると聞いています。

14 学生たちが目指してくれる姿

これは学生達が私たちに示してくれている絵ですけれども、学生達が目指しているのは「農村と学生と都市部」、この三つをうまく連携していこうと、そういった意味で「この交流というのをうまく盛りあげていこう、作っていこう」と彼らはいってくれています。

私たちこの西紀南地区というのは農村部になるのですけれども、農村部と学生と双方でみた場合に、学生は発想とか労働力を農村、農家の皆さんにお伝えして、農家は学生達に地域資源として地域の温もりとか、知識・経験を学生達に伝えて、学生達は吸収できるということをいってくれています。

また、学生達は、「じゃあ都市部に対してどうなのだ」という時に、こういった交流をすることによって篠山の西紀南、あるいは篠山をどんどん紹介していくと。紹介していった都市部の方が「うん、いいところだな」と感じてもらうことが、学生にとっては「ああ、こういう交流をすることが本当にいいことなのだ」と「やる気が出る」と学生達から聞いています。そういう意味から、この交流は、「今後とも継続して都市部と繋ぐパイプ役にもなりたい」とし、また学生達もこの地域と交流して、自分たちの新しい知識が「今後の社会生活でプラスになるとか、勉強になるという意味ではなく、人間性、あるいは人間としての確立もできるのではないか」ということをいってくれています。

私達は学生の思いを言葉では聞くのですけれども、彼らも実感として感じていることなのだと思うのです。そういったところを感じてくれれば地域としても嬉しいと思っています。

す。

15 まち協が考える課題

最後に、地域の若者と学生達との連携について、農家さんとの連携はもう密にできているのですけれども、若者との連携がなかなかできないのです。そういった若者は、昼間出ているのですけれども、土曜、日曜にはこの地域に結構いますから、そういった若者と「どのような交流ができるのか」、あるいは「どうしたらいいのか」というところを模索しています。一つとして、地元の若者は、逆に「地域の良さというのを感じとる」というよりも、「都市部に憧れる」という気持ちが強いのです。それがもって「地元への愛着」という意識が希薄になってきています。それをなくすためにも学生とのうまく交流ができたらしいうことを考えたりしているのです。学生も考えてくれているのですけれども、そういったところがうまくマッチングできていないという問題があると私どもも思っています。

それとこの下は余談ですけれども、「情報発信が苦手だ」と。まち協の人間はどちらかというと若い人が少ないので、ここらは逆に学生からどんどん知識を得て、あるいは学生の協力を得て情報発信、今でいう SNS なんかも有効活用できるまち協にしたいと、学生さんとも相談をしているところです。

こういった形でまち協と、まち協全体の活動、それから今やっている神戸大学の学生との交流というところをご説明させていただきました。つたない説明でなかなかご理解できなかったと思うのですが、私ども学生と活発な活動をさせていただいているという状況です。

質疑応答

○垣内由起子(司会:篠山市創造都市課)

何か質問がございましたら、ざっくばらんにしていただけたら。

○杵本敏男(和歌山大学 食農総合研究所)

北山さんが中心でずっと頑張ってこられたおかげだと思います。

○北山透(講演者:西紀南まちづくり協議会 事務局長)

私は好きでやっているのです。学生が好きです。

○杵本

それはわかるのですが、それがまた学生を惹きつけているのだと思うのです。

○辻和良(和歌山大学 食農総合研究所)

北山さんは農家ですか。農業をされているのですか。

○北山

なんというのですか、私も半農家というのですか。一応農地もあるのです。私個人で自営業をやっているのですけれども、それをやりつつの農業もやっているのです。

○大西敏夫(和歌山大学 食農総合研究所 所長、経済学部)

学生が4人から35人と幅があるのですけれども、来られる時に何人来られるのかというのは事前に把握されているのですか。

○北山

そうなのです。

○大西

こちらのイベントにしても、例えば、お祭りであるとか、農作業もこのところに作業支援をとく、というようなことをなかに入られて調整されるのがちょっと大変かなど。そのところをどう工夫されているのですか。

○北山

ちょっとみえにくいかと思うのですが、こういった農ボラ割付表という。これは手書き

でパソコン上にいれるのですけれども、「何月何日は何人欲しいです」という希望を聞いています。

学生達は、農ボラを（農業ボランティアを農ボラと略称しているのです）、毎週、学生からそのサークルメンバーの希望者を集めた人数をこちらへ木曜日に報告してくれるのです。それと農家さんの希望人数もこちらのまち協に農家さんごとに連絡が入りますので、それで人数を確認して、学生からきた木曜日の人数と照合して、希望の数にあるのか、学生がちょっと少ないという時は、農家さんに「ちょっところえて今回は、人数が少ないので」と減らしたり、というように調整をかけて農家さんとマッチングしているのです。だから毎週木曜日にこちらに連絡が入るといような形です。木曜日までに農家さんも次の土曜、日曜日というのは何人という連絡をもらうようにしています。それでマッチングという形でやらせてもらっています。

○大西

あと、こちらに来られて移動はどうされるのですか。それは農家さんが迎えにこられるのですか。

○北山

そうなのです。ここまで学生は電車で。

○大西

10分ほどですね。ここ着いてから。

○北山

そうです。JR 福知山線で丹波大山駅というのがありましたよね。そこから歩いて15分。ちょっと遅い足で20分、歩いてここまできます。

○辻

篠山口ではなくて、もう1駅があるのですね。

○北山

その一つ先の駅で、無人駅です。丹波大山駅という無人駅があるのです。そこから歩いてここまできます。

○大西

一応ここへ現地集合ですか。

○北山

ここが彼らの集まる拠点になるのです。

○大西

ここから各農家さんが迎えに来られて、作業が終わったらまたこちらの方へ。

○北山

ここまで送ってもらおうと。すぐ近くの農家さんへは歩いて行ったりもしています。

○湯崎真梨子(和歌山大学 産学連携イノベーションセンター)

農家さんの農業継続には戦力になっているのですか。

○北山

農家さんいわく「戦力だ」と。年寄りが「私らだけだったら、夫婦 2 人だったらできない。もう大規模農家に預けようか」、だけど「自分でもちょっとしたいしなあ」という時に学生さんに来てもらったら、「何か、自分もやりたい、どうしようかなあ」という時に学生さんの若い声と動きをみていたら、「やっぱり一緒にしよう」ということになって、預けるよりも「自分らでやろう」という気になるということがあると思います。

○湯崎

でも、毎週だったらフォローが逆に大変な時もあるだろうと思うのですけれども。農家さんが送り迎えするとか。連絡するとか。

○北山

それが今まで 5 年、6 年めですけれども、農家さんは逆に迎えに来ることには何もそういうことはないし、むしろ「手伝ってもらおうというのがありがたいという気持ちになってもらっているのかな」と思うのです。「ああ、それやったら嬉しいわ」と皆さんいってもらっているのです。

○大西

基本的にはボランティアですから、来てもらって作業してもらって。仮に朝来たら当然昼にご飯とかありますでしょう。それはどういう形ですか。

○北山

発足時は、ボランティアといいつつも、農家さんは学生が一生懸命やってくれるので、「せめて日当ぐらい」とか、あるいは「電車で来て旅費もいるだろうからせめて旅費ぐらい」ということを農家さんから話が出たのですけれども、学生はあくまでも「私達はボランティアですから、お金は一切いりません」といいました。

○大西

それは割り切って。

○北山

「もらいません」ということだったのですけれども、最初お昼も彼らは「お弁当持ち」といっていたのですが、農家さんが「あまりにもかわいそうだ」ということで、まち協と農家さんとで話をして、それでは「申し訳ないですけど、お昼は提供していただけませんか」ということで、昼食は農家さんに提供していただくことになりました。「そのくらいだったら安いこと」と、「そんなのでいいのですか」ということだったので。皆さんそれぞれお年寄りの手料理を学生さんに食べさせたりして、学生は「美味しかった。あんなの食べたの初めてや」とか、「田舎料理がこんなにおいしいものだとは知らなかった」とか、色々なことを学生達から声が出たりして、ある意味そういう部分もいいのかなと思います。農家さんもそういうのは苦痛になっていないようです。

○植田淳子(和歌山大学 食農総合研究所)

何か保険に入っているのですか。

○北山

傷害保険というか、彼らはボランティア保険っていう、ボランティアに参画している部分についての保険は学生の方で入っています。それからこのまち協の方でも、まち協の事業の一環で交流というのをやっていますので、まち協としても保険は市と話をして、「もし、けがをしたらそちらから下ろしてもらおう」ということで話はできています。

○湯崎

何かトラブルとかなかったですか。

○北山

農家さんとの間ですか。

○湯崎

農家と学生の間です。

○北山

学生と農家さんのトラブルには私共この6年、5年間、聞いていません。ただ地域の方とのトラブルというのですか、苦情は若干聞いたことがあります。

○湯崎

どんな苦情ですか。

○北山

例えば、この地域ですと、学生は夜遅くまでみんなで沢山集まるから、にぎやかにやったらその声が外に漏れて、夏場は特に網戸にしていますので、「遅くまでうるさいぞ」という、そういう苦情を聞いています。それからは「夜9時以降は大きな声を出すな」と聞いています。夜というのはなぜかという、例えば土曜日にボランティアに来て引き続き日曜日もボランティアをしたいという子は、一旦帰ってまた来るとなると時間と交通費がかかります。彼らはここに宿泊して、翌日またいくようにしています。

○湯崎

ここへ寝袋でですか。

○北山

寝袋です。男性はこの下で、女性は上で。女性は広い和室がありますので二階へ。

○湯崎

それはいいですね。

○北山

最近では、農家さんがあまりにもかわいそうだと、布団を余っているから「これ使って」と、布団を持ってきてくれて、二階が布団の山になっています。

○湯崎

学生は前いったように、大学のサークルのようにちゃんと統制されているのですか。

○北山

サークルのなかでも色んな役割っていうか、プロジェクトを作って、例えば地域イベン

トのプロジェクト、それからボランティアプロジェクト、商品開発プロジェクト、デザイン
のプロジェクトとか、そういうプロジェクトができているというのは聞かせてもらって
います。

○湯崎

でないと、帰らずにここに住みつく子が出てきたりとか、出そうな気がしますけれど、
統制されていなかったら。

○北山

それはそうですよね。やっぱりそれだけの数になってくるとやはり何か仕組みとして、
バラバラでは動けないということで、彼らなりに担当する色々なプロジェクトを作ったり
しているみたいです。

○湯崎

大学のサークルにはなっていないのですか。

○北山

自主的なものですね。

○枚本

責任者は教員としているのですけれども、私みたいに全く何も関与しない、ハンコだけ
押すというのもあります。

○湯崎

では、大学のサークルですね。一応。

○枚本

それがちょっと灰色なのですけど、一応繋がりを持っていますということです。トラブ
ルではないのですけれども、1年生で入った女の子がここに入り浸って家に帰ってこない
ということで、親御さんが教務に質問に来られて。そこで「向こうは大丈夫なところでは
ない」といって、「1度見に行ってもらったらどうですか」といったら、非常に安心されて帰られ
たということがありました。

○北山

そうですか。

○杵本

私ども完全に安心しきっていました。北山さんのパーソナリティーでおんぶに抱っこで、ありがとうございます。

○北山

黒豆の枝豆の時期は、にし恋のサークルで「収穫祭」というのを先週やったのです。この枝豆の収穫の時に「希望の学生のお父さん、お母さんも一緒にやりましょう」ということで、年1回のこの時期に、ご両親も来たい方は自由に来ていただいたのです。そこで「どのような地で、どのようなことをしているのだ」といって、私も挨拶したりしているのです。「こんないいところで彼ら活動している、ああ安心しました。」とか「しょっちゅう行くからどんなところかなと、私らもちょっと案じたりしていたのです」という方もおられましたね。「まあ、こういうことをやっているのだったら私も安心しました」と、そういう声も聞かしてもらっています。

○大坪史人(和歌山大学 COC+推進室)

冬場も学生は来るのですか。

○北山

冬場も来ます。寒い時期に。

○大坪

寒い日でも。

○北山

ええ。寒い時期でも農家さんでは収穫とかはなくても、色んな農作業の作業という部分があります。冬場だと、例えば倉庫の片付けとか、漬物を作るとかそういった時のお手伝いです。受入農家さんの一つに大規模農家さんがあります。農場があってそこのお手伝いも年中ありますので、冬場も行ったりしています。冬場はこちらへ来るメンバー数も少ない感じです。もう長い期間やっていますから、どの時期に一番農家さんの希望があるかというのをわかっているようです。大体年間のうち何月はこれだけを多いよ、何月は少ないよ、それによって、うまく学生の方がバランスを作ってくれていますね。

○湯崎

試験もあったりするでしょうからね。

○北山

そうです。試験中はもうぐっと落ちます。特に試験中はこちらに来れるメンバーはなかなかいません。

○辻

この交流を通じて、こちらに残ったというか定住したというのはどうですか。

○北山

その話をさせてもらおうと思っていました。実はこのにし恋のサークルのメンバーのなかから、この地で新規就業で農業をやろうとこの4月から立ち上げてくれている人がいるのです。

○辻

今年からですか。

○北山

はい、今年からです。嬉しいことに農学部の、後でこちらにいますので紹介させてもらいます。また、もう1人も神戸大の院生です。その子も今休学していっしょに立ち上げの準備を、新規就業ってということで農業を志してやってくれています。今2名でここで新しく農業を志してスタートしてくれているところです。

私も嬉しいやら、「ほんまに大丈夫か」というのですけれども、「私がやります」と。私も地域にそれだったら密着して、農地の借り受けとか、家も全部こちらで交渉して話をさせてもらいました。家も借り受けできましたし、農地も今でだいたい40a借りています。

○辻

何を作るのですか。

○北山

多品種野菜です。沢山の野菜で、例えば、都市部のレストランとか、そういったシェフが「こういった食材がいいよ」といった部分をピックアップして、そういったものを作ってそれを卸すといひます。最初から卸先を作って、販路をもう作っているのですよ。いきなり作って売っていますので、農家さんもびっくりしています。

○大西

それはそのサークルに入っていて、農作業というか、土地を借りて、米作りとか野菜作りをされていた方なのですか。その新規就農された方は。

○北山

はい。最初はこちらでどうしたらいいのかわからないので、泥まみれになってやっけて、とにかく土を触るのが好きになって、野菜を作るのが嬉しいという、その感覚をずっと持ち続けたといいます。ところが3年、4年になったら研究の方にずっと没頭しないといけないので、このボランティアもなかなか来れないということだったのですが、やはりその気持ちが断ち切れなくて、もう農業がしたいということで相談がありました。「私こちらで農業したいのです」という話から、「嬉しいんだけど本気でやるのか」と聞いたら、「本気です」というので、「それだったらとにかく頑張るだけ頑張ったらいいだろう」ということで、農地と家はとにかく何とか手配しようとなりました。

農地は地域の方とし恋が交流をずっとしているので、「ここへ来ていた子が農業したいといっているのだけど」「それなら家の土地使っていいよ。使ってくれ、ちょうどいいわ」ということで。ところが人数が少ないのにそんなにいわれても、「ちょっと待ってください」というぐらい。「大規模農家さんに預けようか」という気持ちに皆さんなっていたところに、「地元で若い人がやろうとやる気がある人がいるなら、そっちに作ってもらったほうがいい」。そんな形で、最初はそんなに沢山農地を借りてもできるわけがないので、それは彼らができるようになってメンバーが増えればそれなりに農地もいるようになるだろうし、「作る目的、作る農作物も色々できるでしょう」ということで、「段階を踏んで」ということで。

○大西

課題にもあげられていましたが、地元の若い人は「あんまり地元へ愛着がない」ということです。その人たちの反応ですけれども。実際に受けている農家さんの場合は人手の、猫の手も借りたいというような形で来てもらって、非常にありがたいということなのですね。

ここにおられる若い人とか、あるいは大学に通っている人とか、どこか他の大学に行って夏休みに帰って来たり冬に帰って来たりした時に、神戸大学の学生が逆に来ていて、その辺の反応というか、それはどうですか。

○北山

今おっしゃった部分、実は反応というのですか、意見を若干聞いたことがあります。というのは、今の受入農家さんのところの息子さんが現に大学生で、ここから大学に通っているのですよ。だけど「自分の息子はしないが、同じ年頃の子が来て変なものだけれどし

かたがない。息子は跡を継がないので」と。たまに顔を合わせることがあったら話をしているとはっていました。

他の農家さんの所の若い子と話をする機会があって「小さい時からこんなしんどい農業なんか、したいと思わない」といって。だから、生まれ育ったところが農家さんだと、親をみていて「農業というのがしんどいものだ」と知識や意識を持つのでしょうか。だから跡は継ぎたくない。それよりも都会へ出て会社勤めがいいという意識がどうしても働いてしまうのかなと話を聞いていてそう思ったりします。ですから先程もいいましたように農業というか、地域に愛着を持ってもらうような若者の意識付け、言葉は簡単なのですけれども、いかに意識を持ってもらって、それこそ都市部に出た人も U ターンなり、あるいは I ターンという部分でも彼らが農業でここに根差してということも考えてくれているのですけれども、若い人が、地元生まれの子が U ターンで、こちらで農業なり、あるいは地元で働くという、そういう意識づけを何とか作らなくてはいけないと思ったりしているのです。

○大西

中国山地の山あいのところでしたら、みんな出ているから実際来てもらったらほんとにウェルカムっていうか、歓迎されるのだけれども。こちらの方はどちらかといったら街に近いし、電車に乗りましたら 1 時間ぐらいで大阪に行けますので、在宅で通えるような感じですね。だけど、それだと意識が、農家の方々の子弟というか、子供さんの意識と、逆に都会から来られて神戸大学に入られてそれで農業するというその意識のギャップというか、ずれというか、同じ若者でもそんなに違うかと思ひまして。

○北山

私もその辺りが。本人をちょっと呼びます。

○大坂宇津実(新規就農者 : farm nishiki 農場長)

はじめまして。

○大西

4 月からですか。

○大坂

本格的に動き出したのは 2 月ぐらいです。

○大西

まだ大学を卒業する前で、ひととおり終わって。

○大坂

そうですね。僕は今休学中で、大学院 2 回生の年なのですがけれども、去年の 11 月から休学しているのです。M1 のときに休学して。

○大西

今 2 人ですか。

○大坂

そうです。

○大西

学校を今年卒業した人と。

○大坂

いや、同級生なのなのですが。大学は別です。大学院が神戸大学で、元々僕は神戸大学から進んだのですが、彼は北海道に行っていて、戻ってきて同じ院に入ったという形です。

○大西

2 人で、今年始めて、出荷はもうやっているのですね。

○湯崎

40a ほどで多品種の野菜を作っていると聞いたのですが。

○大坂

今は 1 町ぐらいです。野菜と豆と小豆とか色々です。

○大西

小豆もやっているのですか。

○大坂

はい。

○大西

豆類を。1ha というと大きいですね。もう普通の農家ですね。

○大坂

スタートが3反です。30a ぐらいでスタートして、北山透さんのご紹介もあって増えてきた感じですね。

○大西

提供されている農家の方は無償ですか。

○北山

1年めは。彼らの支援というのと、1年めは資本金も何もないので、とにかく最初は、1年めはとにかく自由に使っていていいと。1年経つと彼らも起業して事業としてやろうとしているので、1年経つととり交わす部分はきちっと契約を結んでという話をしています。

○湯崎

1町は2人でできるのですか。

○大坂

大丈夫です。

○湯崎

これはどのぐらいの年収になるのですか。

○大坂

僕らは今年が初年度です。ものを売ってお金を稼ぐのは、作ることから始まって、営業して、その営業したなかでも売れる筋と売れない筋があって。その模索が終わることはないじゃないですか。ずっと続けていくなかで収益も上がっていくものだと思っています。とりあえず今年は。僕らは農薬とか化学肥料を使わないで有機肥料を使ってやっていますのですけれども、それでこの土地、この土質のところで、あまり野菜をメインでやっている方がいないので、それでどのようなものができるのかを確かめようとしています。

○大西

試行錯誤みたいな。

○大坂

そうです。

○湯崎

事業計画のなかで1町ないと収益がとれないとか、そこまではまだわかっていないということですか。

○大坂

そうですね。収益、赤にはなってないですけど、今のところ。まだ、回しているところで、一応データはとっていますけれども、まだきっちりしたデータにはなっていません。

○湯崎

やれていくのに広さの基準というのがあると思うのです。あんまり小さかったら成立しないとか。それがどのくらいかなと思って。

○大坂

大きすぎても、小さすぎても、どちらも一長一短ですね。

○湯崎

そうですね。

○大坂

僕はこの「にしき恋」でこの地域に関わって5年目です。就農のプロセスでは、農家さんで1年やってみて、その後独立して1年めをスタートするというのが就農の基本的な形と市は認識されているみたいなのです。僕らはいきなり自分らでやっているの、そういう意味で補助金の申請とかは難航しているところがあるのです。

○北山

絵に描いた餅でね。役所さんはベースこうですよ。農業を新規就農するためにはこういうベースを踏んだうえでやってください。それをやれば補助金申請した時には補助金出しますよ、という融通の利かないやり方です。

○大西

だけど頼もしいですね。

○北山

嬉しいです。

○大西

彼らを、周りもみているでしょう。

○北山

ええ。その農地のところをとおりかかったら止まって感心していますね。

○辻

「きちんとやっているか」とみられているのちがいますか。

○大坂

最初は多かったです。「心配して、どうや」みたいな、「行けるのか」みたいなのが結構多かったです。

○北山

最初はむしろ心配でみるというところが多かったのかもしれないです。

○大西

頑張ってください。いい話をきかせていただきました。

○辻

ありがとうございました。

付属資料

西紀南まちづくり協議会



西紀南地区の現状

- 当地域は篠山市の西部に位置し、肥沃な田畑に恵まれて米作や川北黒大豆に代表される畑作が中心の温帯な地帯です。また近年はJR篠山口駅、舞鶴若狭道ICに10分程度という交通アクセスの良さから企業立地も進み、人口が流入し通勤通学する住民が増加するなど非農家世帯が増加してきています。一方では農業を担ってきた世代が高齢化により農地の維持管理が困難になってきている現状も現れてきています。
- 我々が誇る田園風景も徐々に変化しつつあります。

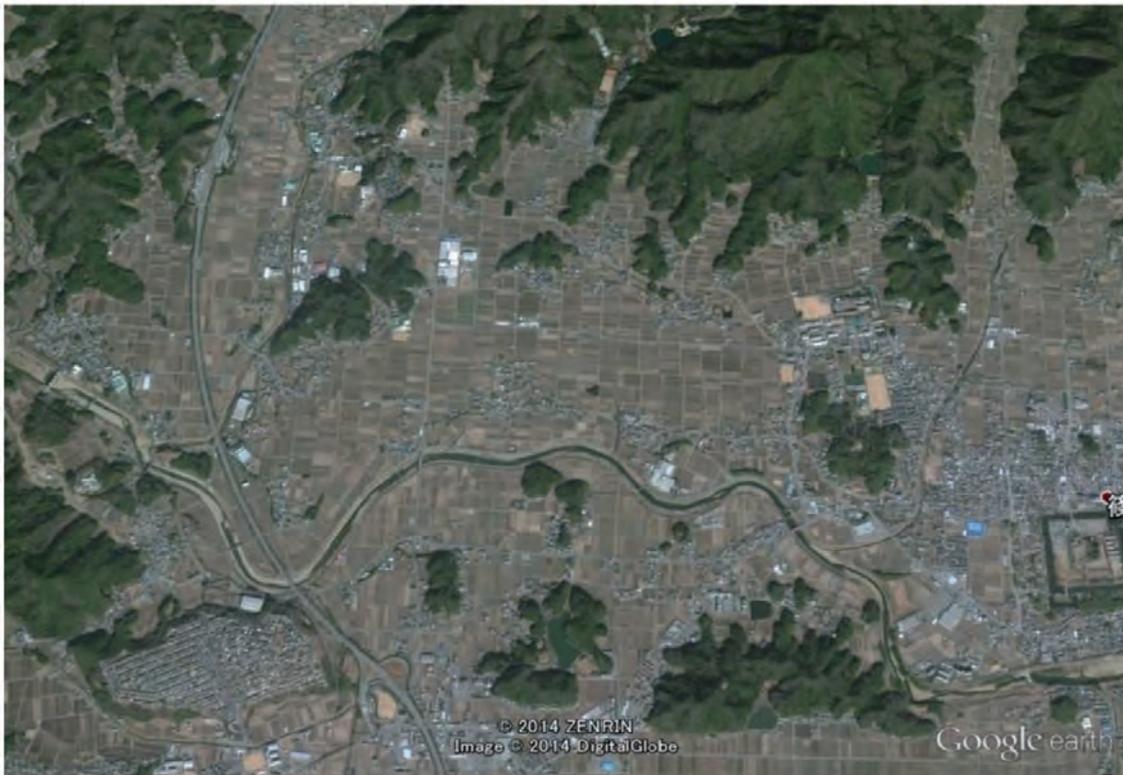
まちづくり協議会の意義

- このような状況の中、「**住んでよかった**」、「**住んでみたい**」田舎まちとして、また将来にわたって誇れる地域とすべく、将来像を明確化し住民意識の共有化を図りながら実践していくための地域組織として「西紀南まちづくり協議会」を発足させました。また同時に県民交流広場事業の支援を受け地域づくりの拠点施設「みなみ・ほっと・サロン」を整備しました。

西紀南地区の位置



西紀南地区の位置



西紀南地区の位置



地域内でのまち協の活動

○当まち協は、まち協全体で取り組む内容と各部会が主体となって活動する内容とに事業を分類している

まち協全体で取り組むイベント事業として

“ふれあいの集い”を実施



- ・防災訓練
- ・防災運動会
- ・地域散策ウォーク



住民間の交流を主目的として毎年開催している

まち協としての優先取り組み

取り組みの重点施策

- ・地域定住化促進
- ・自然、環境の維持・継承



西紀南まち協として以下の事業を実施継続中

- ① 都市部の方々との交流事業
- ② 学生達との交流事業

① 都市部の方々との交流事業

当地域内で農作業をボランティア参加していただく中で、この地の自然と食を自ら体験していただき体感で良さを知ってもらう。



●収穫の指導風景



●ボランティアの方々との交流会

農家の耕作地でボランティア参加



●丹波黒豆の植付け



●地元産丹波黒枝豆の販売手伝い



●自分達が育てた野菜で食事会



●昔ながらの農法で作業されてる農家さんの手伝い

○都市部および他地域との交流事業は4年目を迎え、月1回の周期で毎月当地に来篠され定着化するようになってきました。

平均6名～10名の参加

成果

○篠山の自然と農業の大切さを知っていただき、今後もこの地に継続してやって来たいと言って頂いています。

今後も継続の事業として取り組んでいきたい。

〈参加の皆様方〉

当地で農業ボランティアの経験をして住んでみたい土地候補と評価頂いています。

参加：自由参加

作業内容：農家さん宅の作業をお手伝い

〈例〉

黒豆栽培、野菜栽培、里山整備等



② 学生達との交流事業

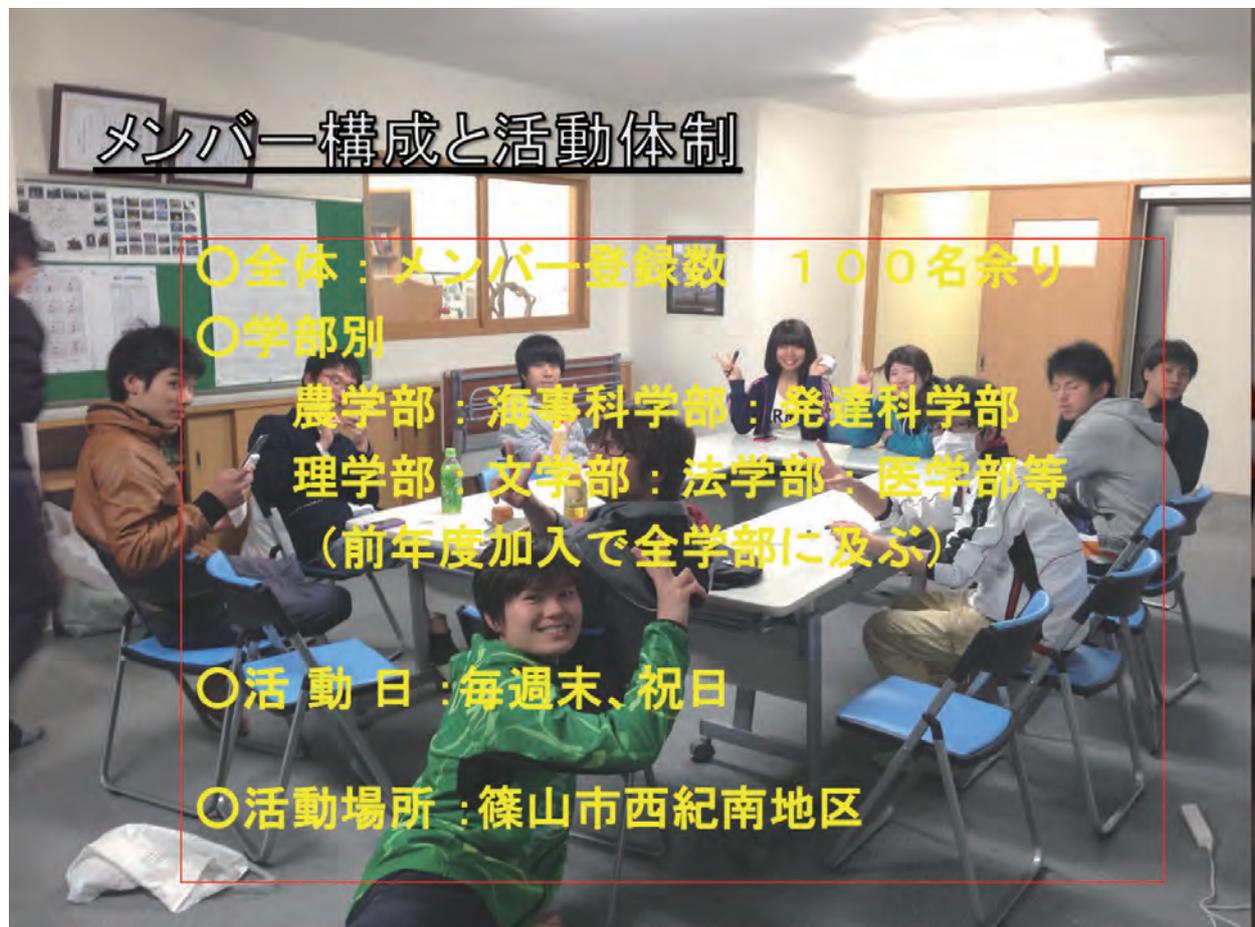
○西紀南地区に神戸大の学生が、当地の人々と農作業への従事やイベント参加を通じて、人との交流と地域を盛り上げたいという主旨でボランティア参加していただいている。

* 学生の活動内容 *

大学内でサークル“にしき恋”を結成し平成25年度より毎週末、祝日とほとんど欠かさず当地に来篠してもらっている。

(少ない時で4名～多い時で35名ほど)

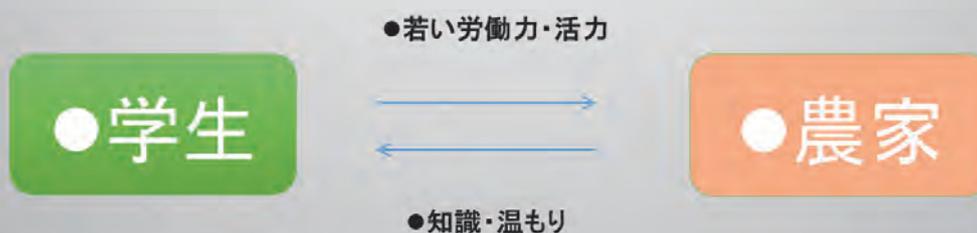
・現在では他大学の学生も神戸大の学生を通じて参加いただいている。



主な活動

- 農業ボランティア
- にし恋farmにおける生産→販売の実践
- 地域活動
- 里山整備の活動支援
- 他団体との交流

農業ボランティア



- 互いが利益を得れる関係性を維持して
いくことを目標に



学生達が農業ボランティアを通じて得るもの

- ・にしき恋のメインとなる活動。黒豆のことを知り尽くした農家さんのお手伝いをしながら、その豊富な実践的知識を吸収蓄積していく。

西紀南地区が学生との交流で得るものは

(住民の声)

- ・ 学生達の元気な声を聞き、また姿を見ることによって元気がもらえる
- ・ 高年齢の農家さんにとって若者の労働力は大いに助かる
- ・ 学生の知識と発想が、時にはいいヒントになる時がある
- ・ 里山の整備に協力をしてもらえるのが非常に助かる

地元に密着した交流



●学生達とまち協との意見交換会



●地元の若者と溶け込んでくれてる学生達



●にし恋ファーム(彼らが借り受けた農地)



●農家さん宅で作業の手伝い

学生達が地元の農家さんに借りている農地
(通称:にし恋ファーム)

- 21aの田は二分し米作(コシヒカリ)と黒豆&野菜を栽培
- もう一つの畑12aは黒豆栽培&野菜を栽培



にし恋farm

☆生産

コシヒカリ

夏野菜(トマトなど計12品目)

丹波黒大豆

冬野菜(白菜など7計品目)

学生は生産から販売の学びの場であり、
地元の人との交流の場と考え実践



まさに実践農学



●耕作指導を受ける学生達



●地元の農家さんに野菜作りの指導を受ける学生達

地域に密着した交流



●地元の小学生と生態系の勉強会



●地元の人たちとタケノコ堀参加



●地元の夏祭りに参加



●小学生と交流の後、楽しく給食を一緒に



●地元の秋祭りに参加



●里山の竹林整備に参加



●学生の考える里山を発表する場

学生の地域情報の発信



学生達が目指してくれる姿

●“行ってみよう・住んでみよう”の意識化へ



(最後に)

まち協が考える課題

- ・地域の若者と学生達との連携
- ・地元の若者は地域を愛する意識が希薄
- ・情報発信が不得手(ITの苦手意識)

食農総合研究所研究成果 第5号

2018年3月 発行

著作者 橋田薫、竹見聖司、垣内由起子、北山透
編集 食農総合研究所 都市農村共生研究部門
発行所 和歌山大学食農総合研究所

〒640-8510 和歌山県和歌山市栄谷930

TEL. (073) 457-7126

印刷所 中和印刷紙器株式会社

〒640-8225 和歌山県和歌山市久保丁4丁目53

TEL. (073) 431-4411

